

古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

| | |
|------|---------------|
| 古川遺跡 | 三重県松阪市稻木町字古川 |
| 山口遺跡 | 三重県松阪市井口中町字山口 |
- 2 本書は、平成7年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第3分冊である。
- 3 調査にかかる費用は、その一部を国庫補助を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元松阪市が負担した。
- 4 調査および整理の体制は下記による。

| | | |
|------|-----------------------------------|--|
| 調査主体 | 三重県教育委員会 | |
| 調査担当 | 三重県埋蔵文化財センター | |
| 古川遺跡 | 調査第一課 主事 主事 管理指導課 研修員 | 伊藤裕之 服部芳人 西澤裕幸 |
| 山口遺跡 | 調査第一課 臨時技術補助員 第一係長 | 山田康博 前川嘉宏 |
| 整理担当 | 三重県埋蔵文化財センター | 管理指導課 足立純子、有川芳子、石橋秀美、井田美奈子、井村浩子、柿原清子、川口愛、 楠純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、 豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、 早川陽子、堀内博子、松本泰美、松月浩子、森島公子、柳田敬子 |
- 5 調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、松阪市教育委員会、漕代土地改良区、機殿土地改良区、及び地元の方々の協力を頂いた。

| | | |
|----------------|------|--|
| 作業員氏名（敬称略・順不同） | 古川遺跡 | 岩崎文夫、岡田茂男、阪井邦好、鈴木博、中西弘太郎、西田昌之、西出春三、 西村武、青木キヨ、青木つや、池田一子、伊藤繁子、岩崎敏子、岡村智子、 久保田ハナ、鈴木みさゑ、田替藤いつ子、永井すみ子、中島百々代、中西八重子、 西田ミサエ、西田りつ子、松田あさみ、松田市子 |
| | 山口遺跡 | 小栗崎勉、西川隆夫、西川駒雄、本間武雄、小栗崎久子、大西綾子、中谷君子、 橋本八千代 |
- 6 本書の執筆及び写真撮影は、各調査担当者が行い、全体の編集は伊藤裕之が行った。
- 7 本書の方位は、真北を用いた。なお、磁北方位は、西偏6度20分（平成3年、国土地理院）である。
- 8 本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

| | | | |
|-------------|----------|----------|---------|
| S B = 挖立柱建物 | S E = 井戸 | S K = 土坑 | S D = 溝 |
|-------------|----------|----------|---------|
- 9 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに保管している。
10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

| | | | |
|-------------|------|--------|----|
| I. 松阪市稻木町 | 古川遺跡 | (伊藤裕之) | 1 |
| II. 松阪市井口中町 | 山口遺跡 | (山田康博) | 33 |

図版目次

I. 古川遺跡

| | | | |
|-----------------|----|------------|----|
| 図版1 調査区全景 | 24 | 図版6 S K38 | 29 |
| S B 1 | | 調査区東部分作業風景 | |
| 図版2 S E 9 | 25 | 図版7 出土遺物 | 30 |
| S E 9断面 | | 図版8 " | 31 |
| 図版3 S E16底部 | 26 | 図版9 " | 32 |
| S E16断面 | | | |
| 図版4 S E16遺物出土状況 | 27 | II. 山口遺跡 | |
| (上層土器類群) | | 図版10 調査区全景 | 37 |
| S E15 | | 出土遺物 | |
| 図版5 S E47 | 28 | | |
| S E47断面 | | | |

挿図目次

I. 古川遺跡

| | | | |
|-------------------|-----|-------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 1 | 第14図 S K38・S K41遺物出土状況図 | 13 |
| 第2図 遺跡地形図 | 2 | 第15図 遺物実測図 | 18 |
| 第3図 調査区位置図 | 2 | 第16図 " | 19 |
| 第4図 遺構全図 | 3 | 第17図 " | 20 |
| 第5図 遺構平面図 | 4・5 | II. 山口遺跡 | |
| 第6図 S B 1実測図 | 6 | 第18図 遺跡位置図 | 33 |
| 第7図 S E 9平面図・断面図 | 7 | 第19図 遺跡地形図 | 34 |
| 第8図 S E16平面図・断面図 | 8 | 第20図 調査区位置図 | 34 |
| 第9図 S E16遺物出土状況図 | 9 | 第21図 S D 2及びS D 3土層断面図 | 34 |
| 第10図 S E15平面図・断面図 | 9 | 第22図 遺構平面図 | 35 |
| 第11図 S E47平面図・断面図 | 10 | 第23図 遺物実測図 | 36 |
| 第12図 S K 1平面図・断面図 | 12 | | |
| 第13図 S K 4平面図・断面図 | 12 | | |

表目次

I. 古川遺跡

| | |
|-----------|----|
| 第1表 遺物観察表 | 21 |
| 第2表 遺物観察表 | 22 |
| 第3表 遺物観察表 | 23 |

II. 山口遺跡

| | |
|-----------|----|
| 第4表 遺物観察表 | 36 |
|-----------|----|

I 松阪市稻木町 古川遺跡

1 位置と環境

古川遺跡（1）は、行政上は三重県松阪市稻木町字古川に所在する。三重県と奈良県との境にある高見山に源を発する櫛田川は、伊勢湾に向けてほぼ東流し、JR紀勢本線の櫛田川橋梁のあたりで、祓川を分流する。古川遺跡は、その分岐点から、北東に約2kmにあり、沖積平野の標高11mの自然堤防上に位置する。

現在、櫛田川の分流となっている祓川は、旧河道や自然堤防の発達が著しく、かつては櫛田川本流であったと考えられている。櫛田川は、たびたびの乱流を繰り返すが、永保2年（1082）の大洪水によって、現河道になったと伝えられている。

この地域は、古代における国郡制下の中では伊勢国飯野郡に属し、東寺領大國荘の荘域にあった。11世紀後半には、神宮を背景に稻木大夫と呼ばれた荒木田延能の活躍がある。中世になると「稻木神田」「中稻木御園」の名が見られ、伊勢神宮の支配下に置か

れていく。又、「言嶽御記」弘治3年条（1557）によれば、当地には市が立っていたことが知られ、参宮街道の要地であったこともうかがえる。

祓川を挟んで斎宮跡（2）と接する当該地域には、古代から中世にかけての遺物分布地は多い。櫛田川右岸の中の坊遺跡（3）、古轡通りA遺跡（4）、古轡通りB遺跡（5）、萱原通り遺跡（6）、崩れ通り遺跡（7）、早馬瀬遺跡（8）は、自然堤防上にあり、多くの土器片の分布が見られる。しかし、当該地域の発掘調査例は少なく、集落跡については不明な点が多い。櫛田川左岸では、昭和53年の県道改良工事に伴う山添遺跡（9）³の発掘例があり、平安時代から中世にかけての建物や井戸などが確認されている。

なお、櫛田川と祓川とに挟まれた地域一帯の土層の下部は、良質の礫や砂砾であるために、かなりの範囲で砂利の採掘が行われている。



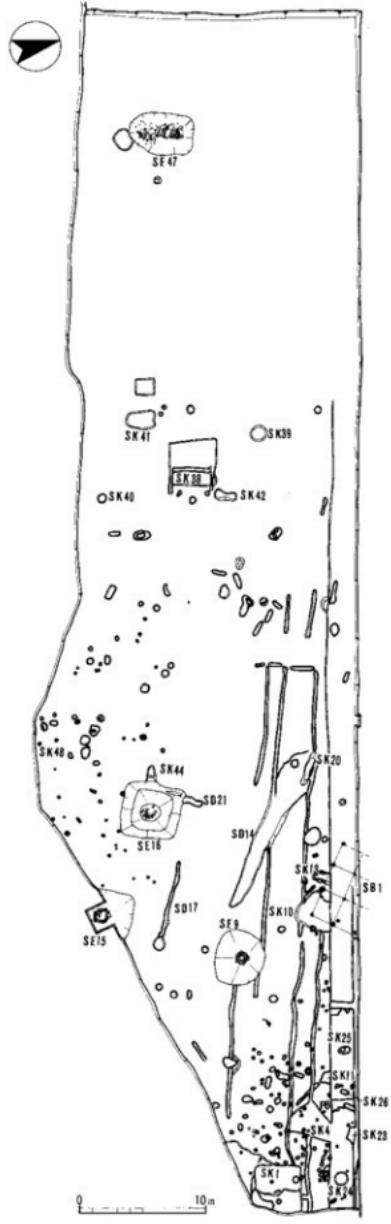
第1図 遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院「松阪」1:25,000より)



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000) (■試掘坑)



第4図 遺構全図(1:400)

2 調査に至る契機と経過

当センターは、平成7年度の県営ほ場整備事業（滑代地区）に伴って分布調査・試掘調査を実施した。その結果、事業地内の6,500m²に遺跡が及ぶことが判明した。そのため、事業により削平を受ける1,700m²について本調査を行うこととした。期間は平成7年11月1日～12月22日の53日間である。

3 層序

遺跡の基本的な層序は、上より第1層：耕作土、第2層：暗黄褐色土、第3層：黄褐色土、第4層：淡黄褐色シルト、第5層：砂礫層となる。第2層が遺物包含層である。第1層から第3層への土質の変化は、全体的に漸移的である。検出面は、第3層上面である。また、第5層の表面にはこぶし大の礫を含むところもみられる。

4 遺構

(1) 古墳時代の遺構

調査区中央部付近を中心に、古墳時代の遺物が多数出土した。遺物包含層からの出土が中心である。多くは氾濫による流れ込みと考えられる。

(ア) 土坑

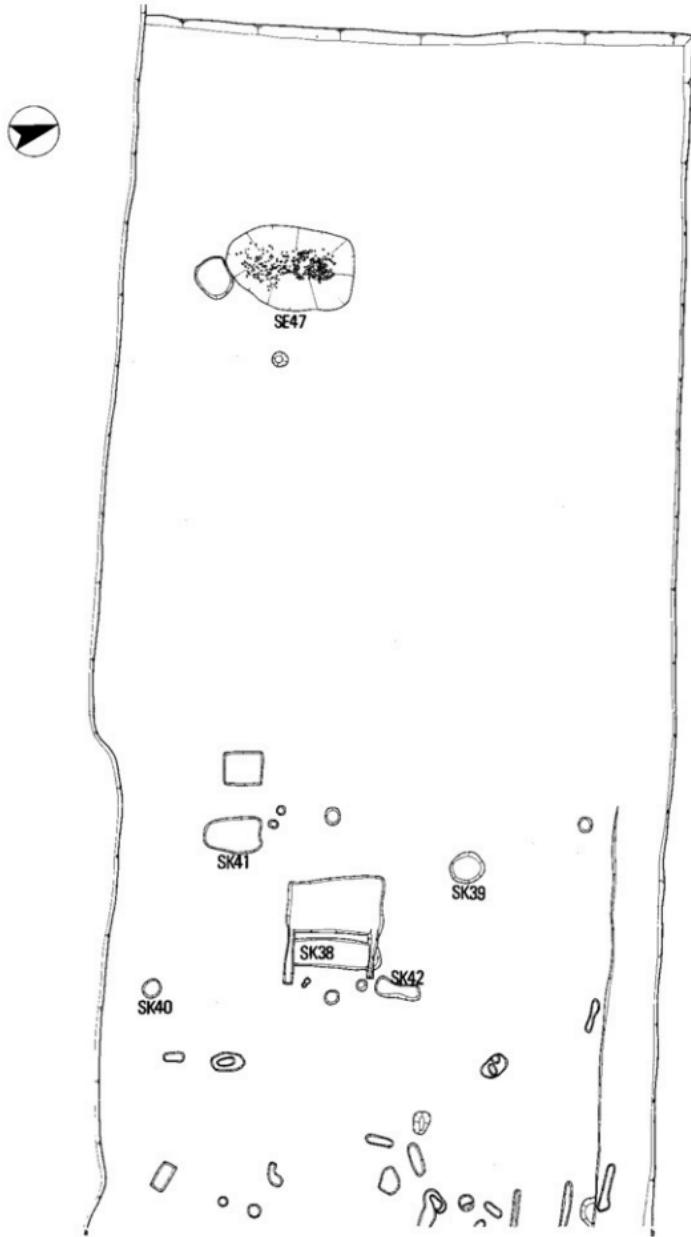
S K48 調査区中央部南側付近で検出された直径30cmの円形の土坑で、底部までの深さは24cmである。S字状口縁台甕（1）が出土した。

(2) 飛鳥・奈良時代の遺構

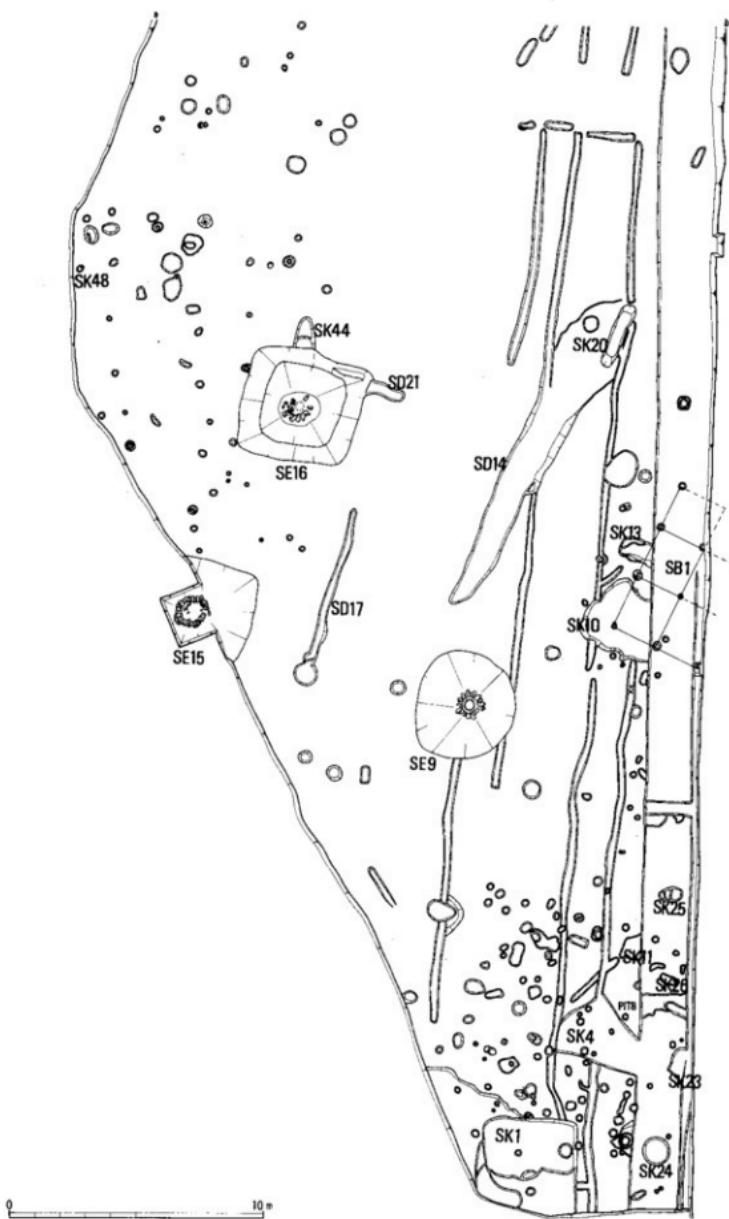
調査区中央部南側付近で飛鳥・奈良時代の土師器碗・甕が多数出土した。S D17（鎌倉時代）の南側には、焼土が確認された。

(ア) 土坑

S K40 調査区中央部南西付近で検出された直径70cmの円形の土坑である。底部までの深さは20cmである。土師器碗（2）が1点、ほぼ完形で出土した。



第5図 遺構平面図 (1:200)



(3) 平安時代の遺構

調査区東部分のSK4の周辺に、いくつかの小穴が確認された。

(ア) 土坑

SK4 調査区東部分で検出された不定形の土坑である。規模は長軸が推定410cm、短軸が200cm、深さが23cmである。埋土からは、多くの遺物が出土し、特に2層目の炭混じりの暗灰褐色土からは、土師器皿・甕のほかに、ロクロ土師器碗が11点出土した。

SK42 調査区中央部西寄りで検出された不定形の土坑である。規模は長軸180cm、短軸65cm、深さは16cmである。土師器皿(7)・甕が出土した。

(4) 鎌倉時代の遺構

(ア) 捜立柱建物

調査区東部分と中央部南側で、多数の小穴を検出した。小穴群の広がりから、複数の掘立柱建物の存在が想定されたが、果樹抜根による擾乱のため、確認できたのは1棟のみであった。

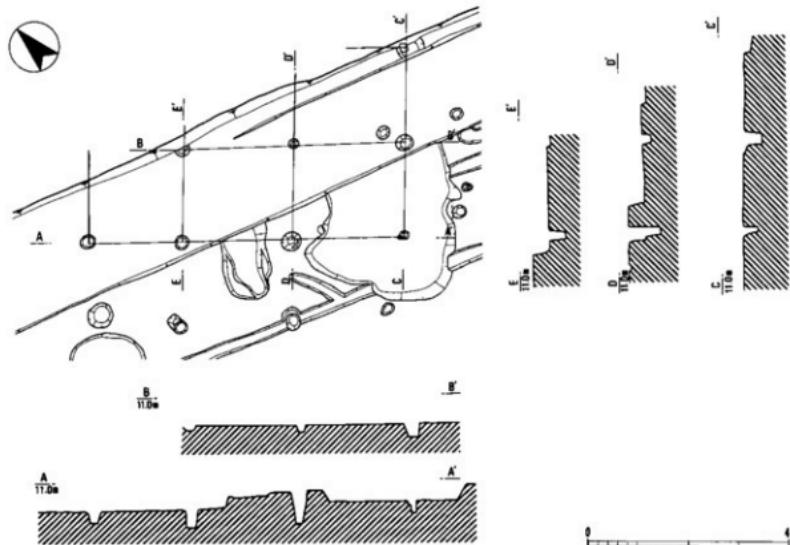
SB1 調査区東部分北側に位置する。3間×2間

以上の総柱の掘立柱建物である。建物方向は、N43°Eである。柱間は東側から2.2m+2.2m+1.8mで、西側の柱間が狭い。南北柱間は1.8m等間で、南北柱間より東西柱間のはうが長い。なお、内側柱穴の南1.8mの延長上に柱穴があり、さらに南側に広がる可能性があるが、南東部分が抜根による擾乱のために確認までは至らなかった。柱穴からは、土師器皿の小片が出土した。

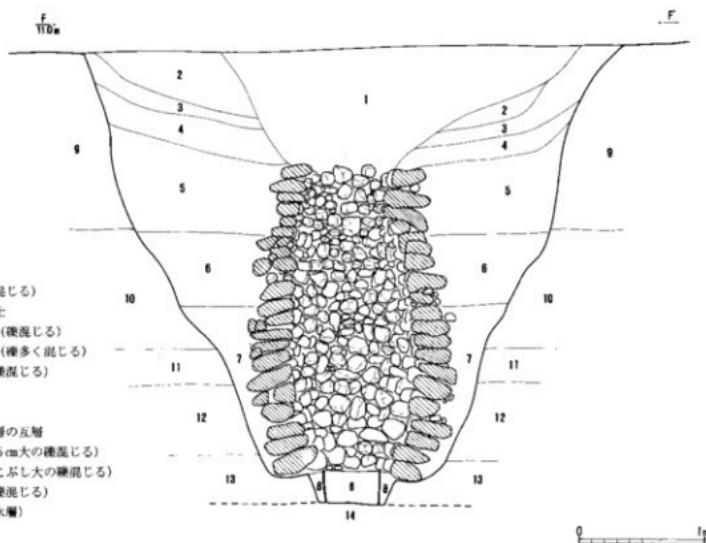
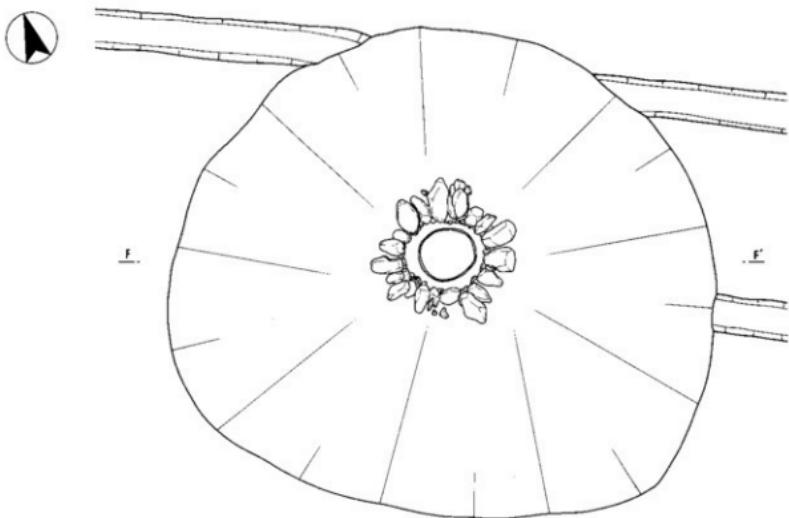
(イ) 井戸

調査区全体から4基の井戸が検出された。いずれも石組井戸、あるいは石組井戸の痕跡を残すものである。出土遺物から、鎌倉時代に構築されたものと考えられる。

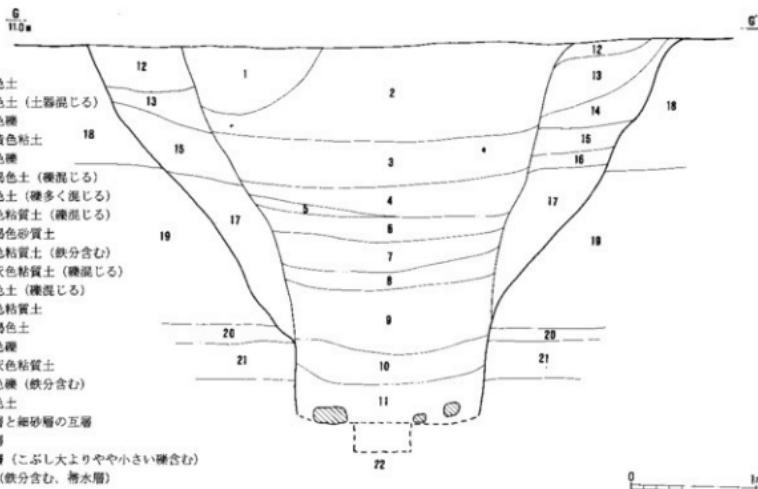
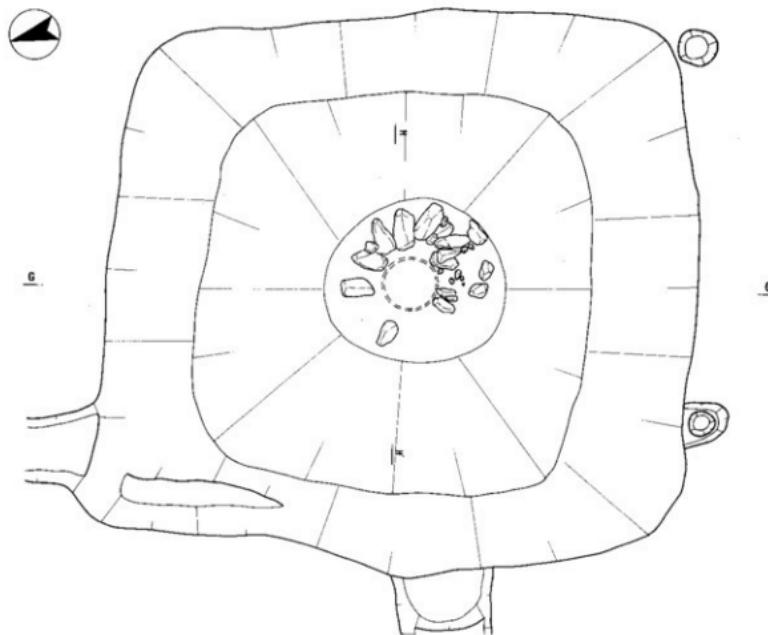
SE9 調査区東側の中央部、SB1の南東4mにある円形の石組井戸である。掘形は、円形で南北径410cm、東西径430cm、深さは約380cmである。井戸の底には、井筒として径40cmの曲物の痕跡が認められた。その上に20~30cm大の川原石を積み上げ、裏込めとして積石外側の隙間にこぶし大の石を組み込み安定させてから、土を入れている。積石の断面は、底から8段目付近が最も膨らんだ形(径100cm)の下



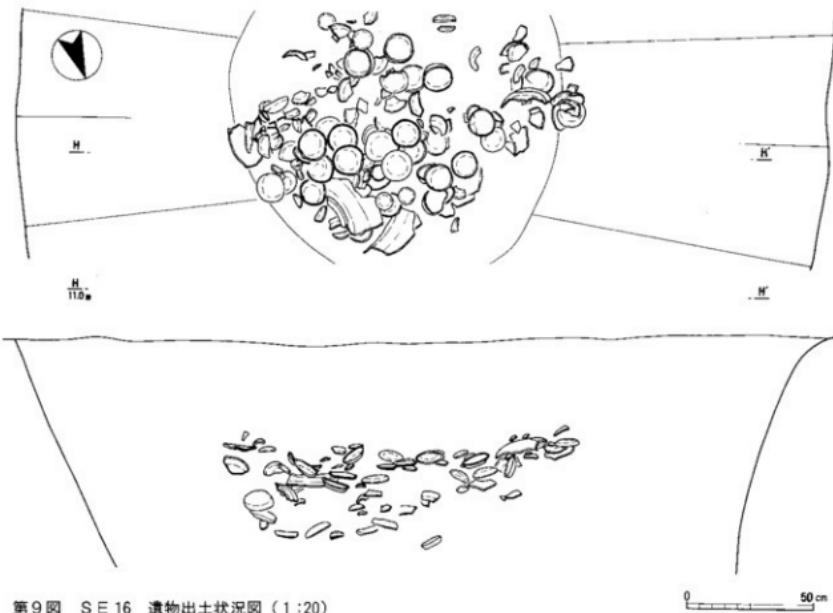
第6図 SB1実測図(1:100)



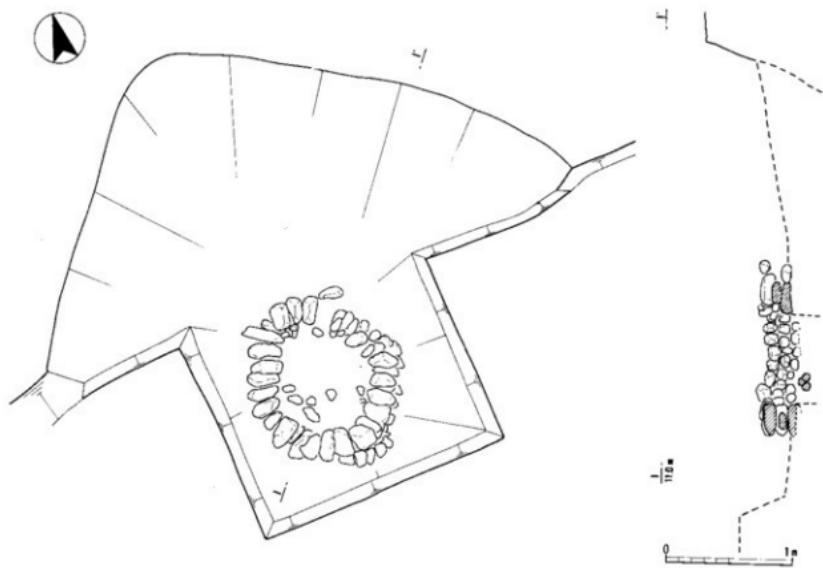
第7図 S E 9 平面図・断面図 (1:40)



第8図 SE 16 平面図・断面図 (1:40)



第9図 SE 16 遺物出土状況図 (1:20)



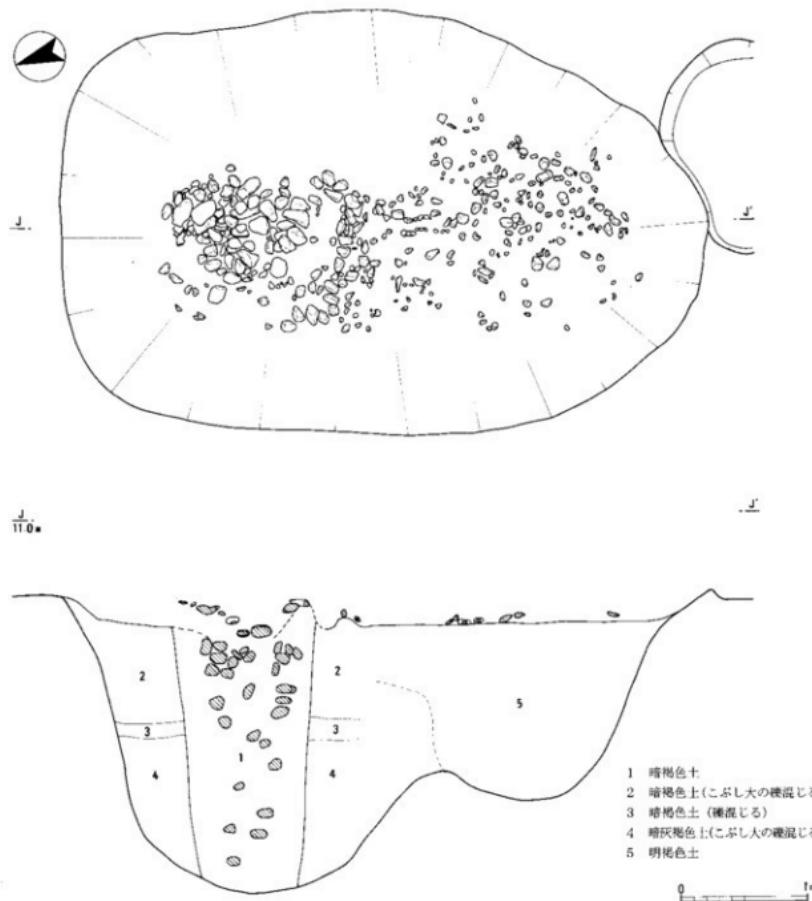
第10図 SE 15 平面図・断面図 (1:40)

膨れ状である。上段に向かって、だんだん狭くなり、最上段部における内径は約60cmである。土師器皿・鍋、山茶椀、陶器の甕等の小片が井戸埋土内に含まれていた。

S E 15 調査区東部分の南端、S E 9 の南4m、S E 16 の東2mに位置する円形の石組井戸である。掘形は、方形で一辺480cm前後と推定される。20~30cmの川原石が使用され、最上段部における石組みの内径が約70cmである。井戸内には、積石に使われてい

たと考えられる石が数個転落していたことから、検出した最上部の石組みよりも、さらに石積みがあつたと想定できる。井側が調査区外のため、上から3段目までしか検出しなかった。掘形埋土からの遺物は多く、土師器皿・鍋・羽釜、山茶椀、陶製の甕、青磁などが出土した。又、梅花紋状に墨書きされた山茶椀(35)も出土している。

S E 16 調査区中央付近に位置する。掘形はS E 15と同じ方形であり、一辺450cmである。石組み最下段



第11図 S E 47 平面図・断面図 (1:40)

までの深さは3m程である。最下段から石組みが検出されたことと掘形の形状から、当初は円形の石組井戸であったが、廃絶する際に何らかの事情で積石を抜き取ったと考えられる。最下段については石組みが半分ほど残っており、礎の中からは曲物の櫛組じの部分(31)が出土した。それらのこととSE9の曲物の痕跡の状態を考え合わせると、SE16には径40cmほどの井筒があったと考えられる。掘形は、深さ2.2m位までは擂鉢状に掘られてから、約80cm直に掘られている。

井戸埋土内からは極めて多量の遺物が出土しており、コンテナパットで約30箱である。山茶碗は、井戸埋土の上層と底部付近を中心に出土している。墨書きされた山茶碗も7点出土している。井戸埋土の第2層の暗褐色土(図8)にはおびただしい量の土師器皿・鍋・羽釜等が重なるようにして廃棄されていた。井戸跡を廃棄土坑として利用したと考えられる。鉄製品も、数点井戸埋土から出土している。

南側に覆屋と考えられる柱穴も一部検出されたが、覆屋の確認には至らなかった。SE16から北側に伸びるSD21は、SE16関連のものとみられる。
SE47 調査区西側の中央に位置する井戸である。掘形は北半分が方形、南半分が梢円形に掘削されている。しかし、井戸本体は北側の方形の掘形のほぼ中央に位置している。石組み部分の内径は約50cmとやや小振りである。石組みの上層部分には、14世紀前・中葉頃の多量の土師器皿・鍋・羽釜等とともに、井戸本体を覆うかのように積み石が重ねられていた。また、石組みを取り囲むように、南側に30cmほどの間隔を空けて2、3段の積石があった。さらに、その南側にはこぶし大の石が一面に散らばっていた。

断ち割りしたところ、2つの掘形が確認された。北半分には、最上部から底部まで深さ約2.4mの円形の石組井戸があり、南半分には深さ約1.4mの掘形が存在している。石組井戸は、深さ1m付近で、石組みが崩壊しており、かなりの積石が井戸埋土内に転落している。又、井戸埋土からは13世紀中葉頃と思われる山茶碗(42)が出土している。SE47が廃絶した時期と石組み上層部とには、時期差が認められる。

又、南側の掘形は、北側の掘形を切る形で掘られていることから、北側の井戸の廃棄後に南側に隣接

して新しい井戸が掘られたが、何らかの理由で途中で掘削が放棄されたのではないかとも考えられる。

のことから、上層部の石組みは、SE47が完全に廃絶してから、その石材を利用して新たに構築されたものである可能性が考えられる。

遺物は、石組み上層部から土師器皿・鍋・羽釜、井戸埋土からは山茶碗、陶器の甕等、北側の掘形を中心に数多く出土した。

(ウ) 土坑

SK1 調査区東端で検出された。370cm×270cm、深さ33cm程の方形の土坑である。北端には、20cm前後の集石が80cm四方に見られたが、性格は不明である。遺物は山茶碗が中心で、土師器甕や青磁も出土した。時期的には、12世紀後葉から13世紀前葉のものが多く、鎌倉時代の遺構のなかでは古いグループに属すると考えられる。

SK10 調査区東部分の北側、SB1の南側に位置する。350cm(推定)×250cm、深さ30cmの不定形の土坑である。底部は、鉄分沈着により固くしまっている。出土遺物は、山茶碗6点(うち墨書き1点)、土師器皿・鍋、白磁片、土鍾等である。

SK11 調査区東部分の北端で検出された。東西径約100cm、深さ22cmである。土師器皿、山茶碗片に混じって、13世紀前葉のものと思われるミニチュアの土師器鍋碗が出土した。

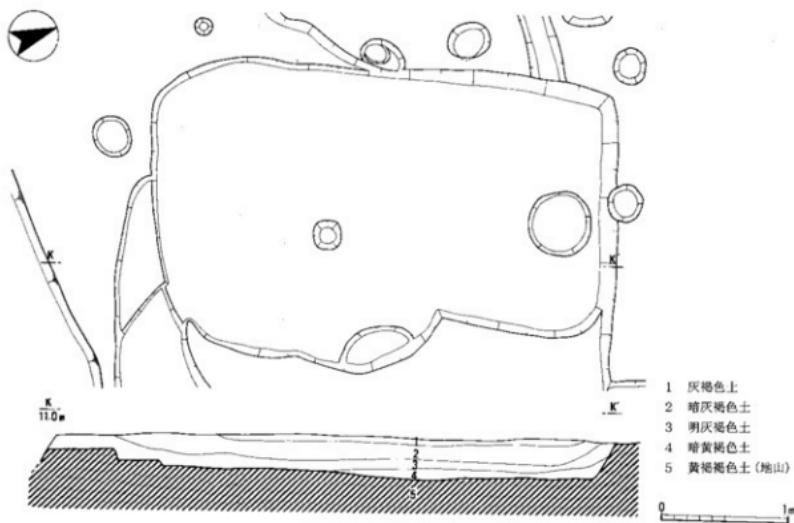
SK13 調査区東部分北側、SB1の南側で検出された。東西径約100cm、深さ5cmの浅い土坑で、土師器皿が出土した。

SK20 SD17内に位置する50cm×260cm、深さ60cmの土坑で、SB1の棟方向とはほぼ平行に走る。こぶし大の礎とともに、土師器皿、山茶碗、陶器の甕が出土したが、古墳時代や平安時代のものも若干混入している。

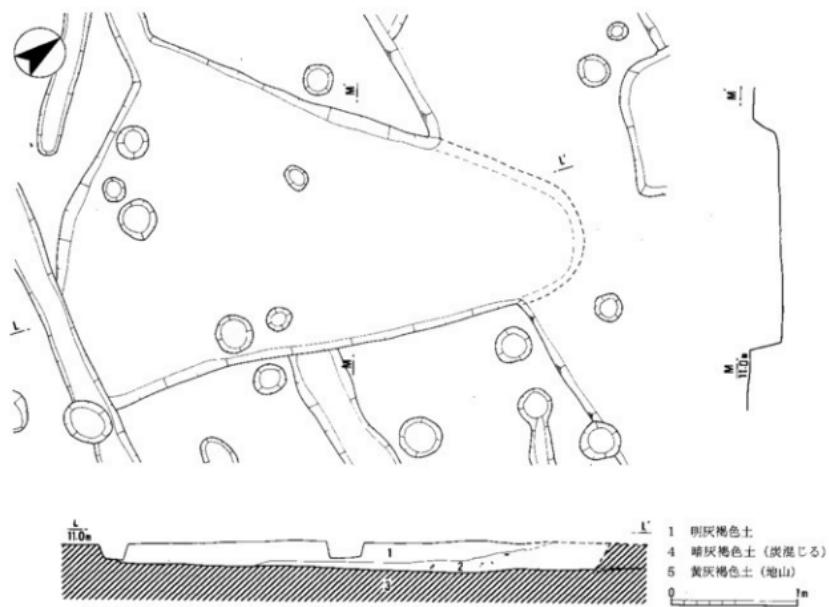
SK23 調査区東部分北端にある60cm×120cmの不定形の土坑である。検出面からは25cm程の深さである。土師器片が少量出土した。

SK24 調査区東端にある径110cmの円形の土坑で、検出面からの深さは35cm程である。土師器片が少し出土した。

SK25 調査区東部分北端にある90cm×60cmの梢円形の土坑である。検出面からの深さは、44cmである。



第12図 SK 1 平面図・土層断面図 (1:40)



第13図 SK 4 平面図・土層断面図 (1:40)

完形の土師器小皿（59）が上向きの状態で3枚出土した。

S K 26 調査区東部分北端にある70cm×40cmの方形の土坑である。検出面からの深さは45cm程で、少量の土師器片が出土した。

S K 38 調査区西部分中央に位置し、南北径370cm、東西径110cm、深さ20cmのほぼ方形の土坑である。遺物は南側に集中し、多量の土師器皿・鍋、山茶碗（うち墨書き2点）等が出土した。

S K 39 調査区西部分中央に位置し、直径が130cm、深さ10cmの円形の土坑である。土師器皿が2枚重ねられた状態で出土した。

S K 41 調査区西部分の南側に位置し、南北径200cm、東西径150cmの不定形で、深さ10cm程の土坑である。出土遺物の量は多量で、土師器皿・鍋、山茶碗（うち墨書き1点）、陶器の甕のほかに瓦、方形石硯も出土した。

S K 44 S E 16の西側に隣接する80cm×130cm、深さ20cm、不整形の土坑である。土師器皿が多数出土し

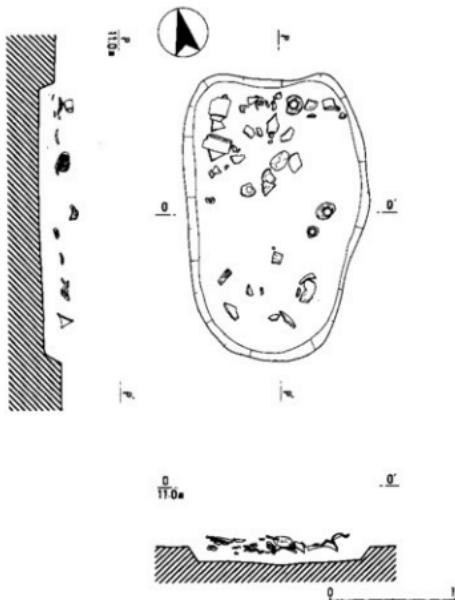
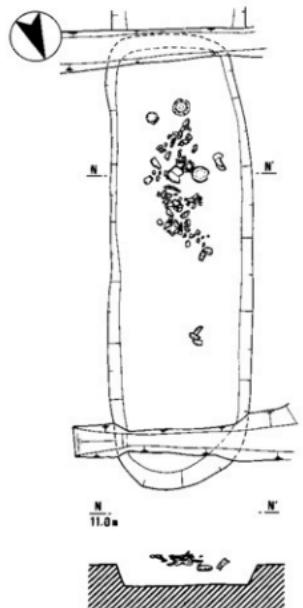
た。S E 16の井戸埋土から出土したものと時期的な差はない。

（エ）溝

S D 14 調査区の中央部北側に、S B 1の棟方向と平行に幅100cm～150cm、深さ10cm程の浅い溝が伸びる。S B 1南西隅付近で北側に曲がるのではないかと推定される。溝埋土には、土師器の細片が多量に含まれていた。

S D 17 幅30～40cm、深さ10cm前後で、S B 1の棟方向とほぼ平行する方向に走る。東端は、抜根による擾乱を受けており、規模は不明である。中央部分からは、数点の土師器皿（75）とともに土師器鍋（76）が倒立した状態で出土し、さらに鍋の下には土師器皿（75）が1点口縁部を下に向かた状態で出土した。

S D 21 S E 16の北側に位置し、S E 16に付帯する溝ではないかと考えられる。幅50cm、深さ20cmである。土師器皿や山茶碗が出土しており、S E 16と時期的な差はない。



第14図 S K 38・S K 41 遺物出土状況図 (1:40)

5 遺物

遺物はコンテナパットにして約100箱あり、その大部分は鎌倉時代の土師器や陶器類である。出土遺物の半数近くが4基の井戸から出土している。他には、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、磁器、土錐、瓦、石硯、鉄製品等がある。以下、時代順に主な出土遺物について概述する。それぞれの詳細については観察表を参照されたい。

(1) 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては、土師器小形丸底壺（78）・高杯（79）・台付甕（1・80）、須恵器杯蓋（81）・杯身（82）・追・大甕が出土している。いわゆるS字状口縁台付甕は、調査区北側付近を中心に10点近く出土している。

(ア) SK48出土遺物 (1)

S字状口縁台付甕（1）口縁が外寄する。肩部には、部分的に描画横線がみられるが、D1類に属し、4世紀後半頃のものと考えられる。

(2) 飛鳥・奈良時代の遺物

調査区中央部南側の焼土を中心に、土師器椀（83・84）・甕（85～87）が出土している。土師器椀（84）は、5個重ねられた形（最上の1個は逆さ）で出土した。86は、口縁一部に煤が付着している。

(ア) SK40出土遺物 (2)

土師器椀（2）底部から口縁部まで緩やかに立ち上がり、内面底部には「X」状のハラ記号がある。2次焼成を受けたと思われ、全体に黒っぽい色に変色している。

(3) 平安時代の遺物

調査区中央部からは平安時代前葉、東部分からは平安時代後葉の遺物が出土した。綠釉陶器（54）は内面に陰刻がされていることから、9世紀後葉から10世紀前葉のものと思われる。猿投窓座であろう。包含層出土の黒色土器椀（90）は、ていねいなつくりである。

(ア) SK4出土遺物 (3～5)

ロクロ土師器椀（4）11世紀初頭に現れる灰釉陶器模倣のロクロ土師器椀の系譜上にあるものと考えられる。

(イ) ピット出土遺物 (6)

灰釉陶器椀（6）内外面に灰釉がハケ塗りされる。10世紀前後の猿投窓座と考えられる。

(4) 鎌倉時代の遺物

今回、最も出土量が多かったのが、鎌倉時代の遺物である。土師器、陶器、磁器、石製品、木製品、鉄製品がある。大半を土師器皿・鍋・羽釜や山茶椀が占める。

(ア) SE9出土遺物 (32)

山茶椀（32）井戸埋土下層から出土したもので、藤澤編年（以下、山茶椀・山皿の編年及び類型名は藤澤良祐氏のものを引用する）の第6型式（腹膨型）と考えられる。13世紀前葉のものと思われる。

(イ) SE15出土遺物 (33～38)

土師器羽釜（36）器壁も厚く、伊藤裕偉氏の編年（以下、土師器皿・鍋・羽釜の編年は、伊藤氏の編年を引用する）によれば、南伊勢系土師器で13世紀頃のものと考えられる。

山茶椀（35）第6型式（尾張型）で13世紀前葉のものと思われる。底部外面に梅花紋状の墨書きがあるが、同様の墨書きがされた山茶椀が、SE47からも出土している。

山皿（34）第5型式（尾張型）で12世紀後葉のものと考えられる。

陶器甕（37）口縁の断面がN字状になっている。常滑窯産の13世紀中葉のものと思われる。

(ウ) SE16出土遺物 (8～31)

土師器皿（8～15）SE16の出土遺物の大半を占めたのが、上層の埋土の暗褐色土から出土した200枚近い土師器皿（以下、上層土師器皿群とする）である。いずれも、口径が11.0～11.5cm、器高2.3～2.5cmのものである。口縁はやや内側に内寄する。伊藤氏の編年によれば、南伊勢系土師器皿のB系統のII b期

にあたる13世紀後葉のものと考えられる。下層の井戸埋土からはⅡ b 期前期にあたる土師器皿が出土している。

土師器鍋 (16・17) 上層土師器皿群に共伴したものである。いずれも小形の鍋で器壁が薄くなっている。南伊勢系土師器鍋の第2段階のb型式に属すると考えられる。出土遺物との共伴関係から13世紀中葉から後葉にかけてのものと思われる。

土師器羽釜 (18) 上層土師器皿群とともに出土した。16・17と同時期のものと考えられる。

山皿 (19) 挖形埋土上層からの出土である。底部の張り出しが少し残っており、第5型式（涅美型）と考えられる。

山茶椀 (20~28) S E 16から少なくとも20個以上の山茶椀が出土しているが、上層土師器皿群とともに出土したものはない。いずれも第6型式（尾張型）に相当するものと思われる。埋土上層出土の22の墨書は右側が不鮮明であるが、「家」とも考えられる。25は、「ゐ」か「る」と考えられる。26は、「る」か「ら」と書かれていたと考えられる。⁹

青磁椀 (29・30) 挖形埋土から井戸埋土下層部にかけて、青磁片が14点出土した。土師器皿群からも出土している。ともに、外面体部には蓮弁文が施されている。龍泉窯産と思われる。同様のものがS E 9、S E 15でも出土している。

(エ) S E 47出土遺物 (39~43)

土師器鍋 (39・40) S E 47の上段の積み石の間から出土している。いずれも南伊勢系の鍋で、口縁部が外反し、端部が内側へ折り返されている。第3段階のa型式の特徴を持っている。14世紀前・後葉頃のものと考えられる。

山茶椀 (41・42) 41は、井戸埋土から出土したもので、第6型式（尾張型）と考えられる。S E 15出土の山茶椀 (35) にも41と同じ梅花紋状の墨書が認められる。42は、上層の井戸埋土から出土したもので、内面がやや直線的となり、部分的には第7型式の特徴もあるが、基本的には第6型式（尾張型）と考えられる。

陶器壺 (43) 上層の井戸埋土から出土した常滑窯産の壺で、縁帯部の上部が下部よりも長く、13世紀中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

(オ) S K 1出土遺物 (44~50)

土師器皿 (44) S E 16出土の土師器皿と比較して、法量は口径で5cm、器高で2.5cmほど大きい。南伊勢系のB系統のⅡ a 期前葉に属すると考えられる。

土師器鍋 (45) 南伊勢系の大形の鍋で、13世紀前葉のものと考えられる。

陶器小橈 (46) 第4型式（尾張型）で、12世紀半ばのものと思われる。

山茶椀 (47~49) 47は、第5型式（涅美型）で、13世紀前葉のものと思われる。48・49は、第6型式（涅美型）で、13世紀前・中葉のものと思われる。

(カ) S K 10出土遺物 (51~55)

山茶椀 (51~53) ともに、第6型式（尾張型）に相当するが、53は体部内外面の直線的なつくりから第7型式の特徴も持つ。

(キ) S K 11出土遺物 (56)

土師器ミニチュア土器 (56) 土師器皿小片とともに出土したもので、13世紀前葉のミニチュアの土師器鍋と考えられる。

(ク) S K 38出土遺物 (60~63)

土師器小皿 (60) S K 38出土遺物のなかで最も多かったのが、土師器小皿である。13世紀後葉のものと考えられる。

土師器皿 (61) S K 16出土の土師器皿と比較すると口径で1.5cmほど大きい。南伊勢系土師器皿のⅡ b 期のものと考えられる。

山茶椀 (62・63) 63は、第6型式（尾張型）と考えられる。62は、第7様式（尾張型）である。外面底部には、ともに「上」という字が描かれている。さらに、62の体部外面には「^二」の墨書もあり、同様の墨書がされたもの (70) がS K 41からも出土している。

(ケ) S K 41出土遺物 (66~72)

土師器皿 (67) S E 16出土の上層土師器皿群のものと比べると口径で約1cmほど大きい。南伊勢系の土師器皿B系統のⅡ b 期（14世紀前半）のものと考えられる。

山茶椀 (68~70) 第6型式に相当し、69は涅美型、68・70は尾張型だと思われる。70の外面底部と外面体部の墨書はS K 38出土の墨書土器 (62) と同じである。

方形石硯 (72) 石硯の形が長方形が基本になるのが鎌倉時代から室町時代とされている。72も、ちょうどその頃に普及したもののひとつであろう。

(コ) S K44出土遺物 (73)

土師器皿 (73) S E16出土の上層土師器皿群のものと同じ II b 期のものと考えられる。

(サ) S D17出土遺物 (74~77)

土師器皿 (74・75) S E16出土の上層土師器皿群のものと比べると口径で約1cmほど大きい。南伊勢

系の土師器皿B系統の II b 期前半 (13世紀後葉) のものと思われる。

土師器鍋 (76) 調査区中央部から倒立した状態で出土した。南伊勢系の第2段階の b 様式の小形の鍋である。13世紀中葉から後葉にかけてのものと思われる。

山茶椀 (77) 上層から出土したもので、第6型式 (尾張型) と思われる。

6 結語

今回発掘した調査区内では鎌倉時代を中心とする集落跡を検出することができた。櫛田川と祓川にはさまれた当地は、自然堤防上を中心に集落の適地であったのであろう。古川遺跡周辺にも、集落跡は点在していると思われる。

掘立柱建物

掘立柱建物の検出は、調査区東部分北側で検出された鎌倉時代のものが1棟に留まった。しかし、小穴の広がりから考えると、調査区東部分の周囲と中央部の南側には、さらに住居等の広がりが予想される。今回、平安時代の住居跡は確認できなかったが、調査区東部分北側を中心に平安時代のものと考えられる小穴等が検出された。このことから、平安時代の住居跡は、調査区東部分の北側に存在する可能性が考えられる。調査区西部分では、遺構・遺物の検出ともに少なかったが、S K41の西側には流路痕と考えられる礫層が広がっており、河川氾濫の影響を受けたことも考えられる。

井戸

井戸については、石組井戸が4基検出された。宇野隆夫氏は、井戸の歴史で中世を「Ⅲ期」として石組井戸が普及する時代としている。石組井戸は、12世紀中頃～14世紀に畿内北部を中心に普及し、15～16世紀中頃に西日本一帯に普及するとされている。県内の調査例でも、室町時代の石組井戸は多く検出されている。さて、古川遺跡の井戸の成立時期であるが、井戸埋土からの出土遺物をもとに推察してみたい。

4基の井戸の井戸埋土から共通して出土したのが、

山茶椀の第6型式である。山茶椀の第6型式が流通消費される頃に、井戸が廃絶したと思われる。S E16では、上層土師器皿群より下層の井戸埋土から、第6型式の山茶碗とともに伊藤編年のII b 期前半の土師器皿が出土している。井戸埋土の第2層の上層土師器皿群が、伊藤編年のII b 期後半のもので占められ、伊藤編年の第2段階の土師器鍋と共に伴していることと対照的である。上層土師器皿群は、S E16が廃棄土坑となってから棄てられたと考えられるごとく、井戸埋土から出土した土師器皿や山茶椀等から考えると、S E16の廃絶時期は13世紀中・後葉頃ではないかと思われる。

なお、13世紀前半頃の龍泉窯産と思われる青磁碗がS E16から13点出土しているほかに、S E 9・15からも出土している。

S E 9・15・16は、ほぼ同時期に存在していたと思われ、13世紀中頃には存在していた可能性が考えられる。

一方、S E47の井戸埋土から出土した山茶椀は、藤澤編年の第6型式後葉のものである。S E47の石組みは途中で崩壊していることから、S E47は一気に埋没したと思われる。したがって、井戸の廃絶時期と井戸埋土からの出土遺物との時間差は少ないと考えられる。13世紀中・後葉には廃絶したのではないかと思われる。

以上のことから、古川遺跡の井戸は、鎌倉時代前期には成立していたのではないかと推測される。三重県内での石組井戸の成立は室町時代とされていたが、鎌倉時代前期にまで成立時期を遡らせてよいと

思われる。

墨書き茶碗

出土遺物については、墨書きのある山茶碗が16例確認されている。そのなかで、別個の遺構からの出土であるが、明らかに同じと思われる墨書きが2組ある。S E15とS E47から出土した外面底部に梅花紋状の墨書きのある山茶碗^⑨(35)(41)と、SK38とSK41から出土した外面底部に「上」、外面体部に「^の」と描かれた山茶碗である。62と70との体部外面の記号「^の」は、天地が異なるが、同じものと捉えて差し支えないとだろう。墨書きの意味には、特定の祭祀や儀礼のために短期的に使用された場合と、土器の使用にあたって他の土器との識別のために記された場合がある。今回の出土品は、山茶碗という日常雑器である。出土場所も井戸の底部ではなく、井戸埋土のなかであつ

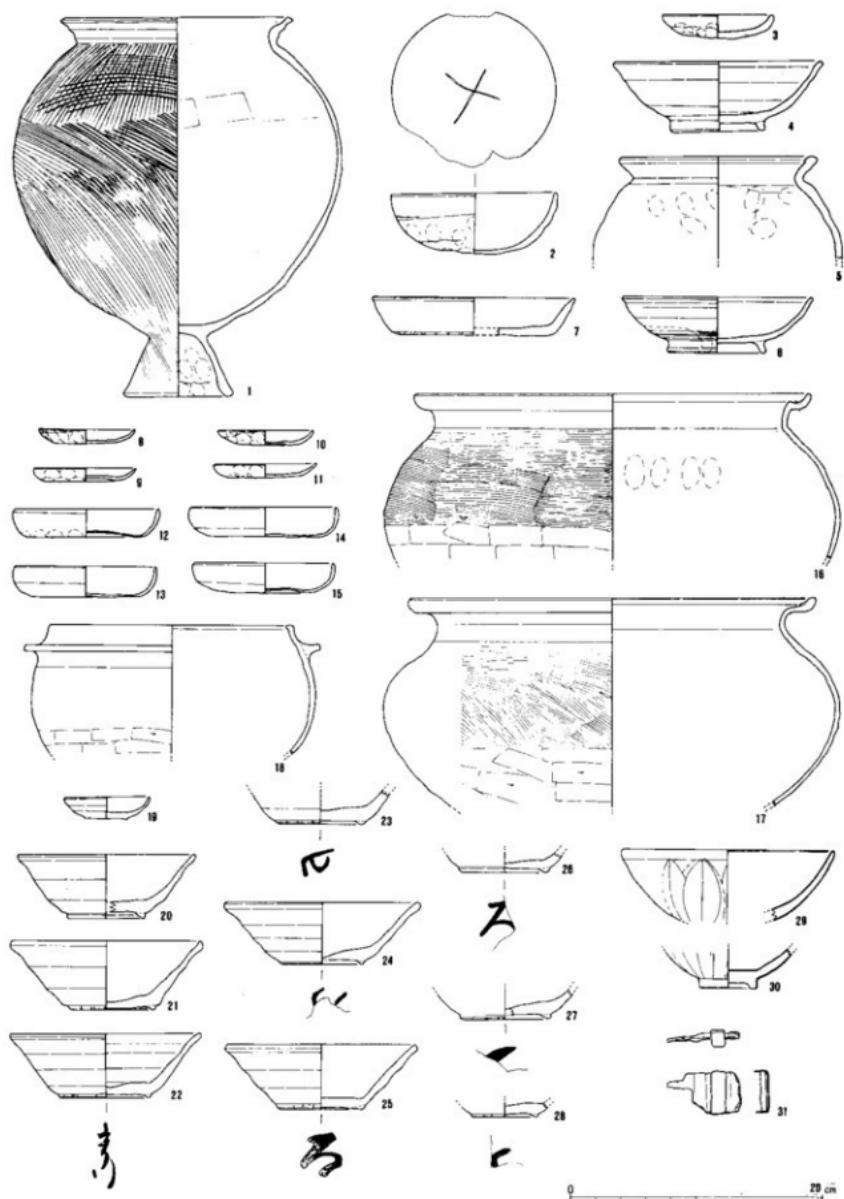
たり、廃棄土坑と思われるところである。したがって、特別な意味が込められたというよりも、持ち主個々、あるいは集団の識別のために描かれたのではないかと思われる。

墨書き土器に関連して、SK41出土の方形石硯は、中世の文字の普及を確認させてくれるものである。国産の石硯が本格的に普及するのが、平安時代末期、12世紀末～13世紀初めにかけてである。また、長方形の石硯が基本となるのが、鎌倉～室町時代である。この頃になると、文字使用的場が、武士などの新興領主層や有力農民に拡大されていく。古川遺跡も、まさにその流れのなかに存在したのであろう。古川遺跡の性格を考えるうえで、ひとつの大きな資料になると思われる。

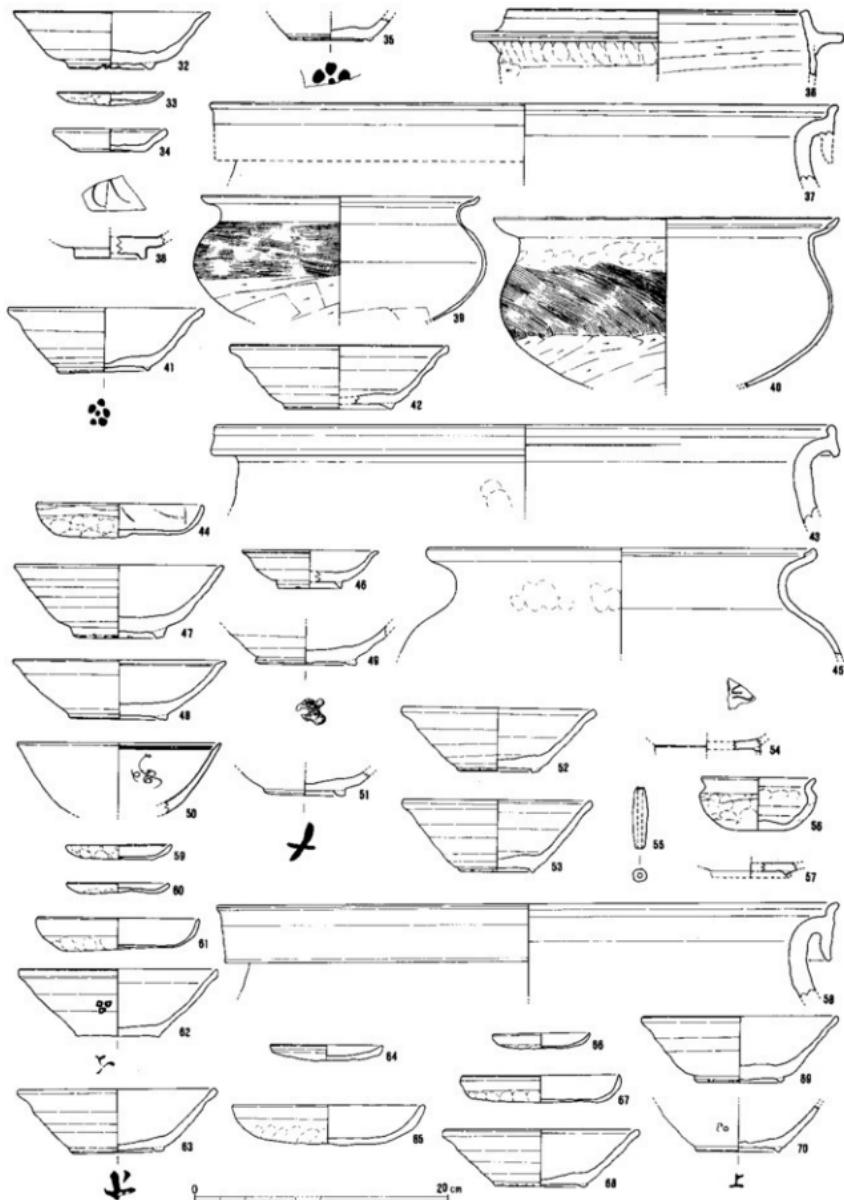
(伊藤裕之)

- ① 「西黒部意多神社由緒記」永保2年7月10日、13日に「櫛田川流域ヲ変じ」とある。(『松阪市史』(第一巻)資料編 自然 松阪市史編纂委員会 1977年)
- ② 「言經御記」弘治3年3月24日条に「^{いなき}」とある。(『松阪市史』(第三巻)資料編 古代・中世 松阪市史編纂委員会 1980年)
- ③ 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1979年
- ④ S字状口縁台壺の編年に関しては、下記の文献を参考にした。
 - 加納俊介「土師器の編年 4 東海」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣 1991年
 - 山田猛「弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年
 - 大川勝宏「斎宮跡の施釉陶器」『古代の土器研究－律令の土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会第3回シンポジウム 1994年
 - 「第95次調査」『史跡 斎宮跡 平成4年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1993年
 - 藤澤良祐「山茶碗と中世集落」『尾呂』瀬戸市教育委員会 1990年
 - 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994年
 - 伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996年

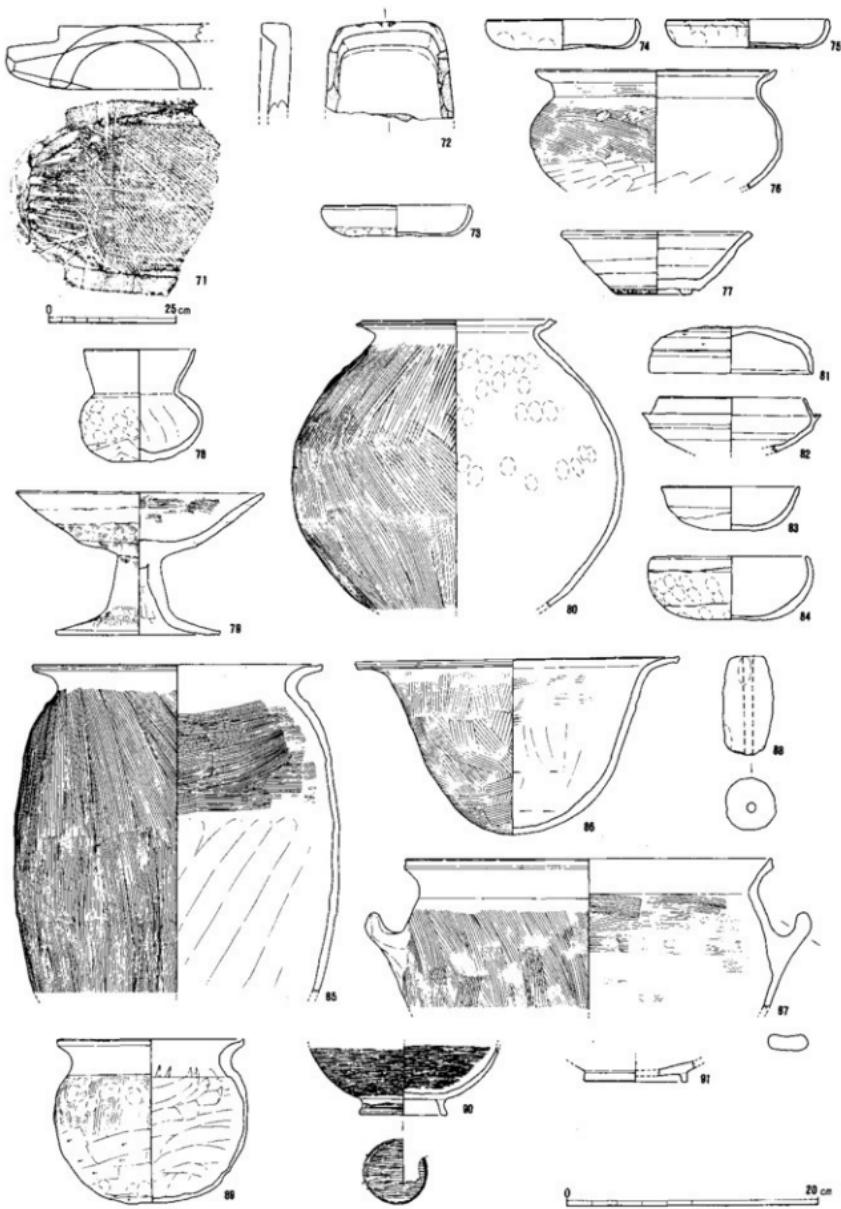
- ⑤ 伊藤裕偉『中世南伊勢系の土師器に関する一試論』『Mie History』1 三重歴史文化研究会 1990年
- ⑥ 墓書きについては、斎宮歴史博物館の榎村寛之氏の御教示による。
- ⑦ 宇野隆夫「井戸考」『史林』65-5 1982年
- ⑧ 室町時代の井戸については、以下の文献を参考にした。
 - 福田哲也「阿形遺跡」『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1992年
 - 新田洋『莊遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1980年
 - 前川嘉宏『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告－第6分冊－蚊山遺跡左郡地区』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター 1987年
 - 梅花紋状の墨書き土器については、岸田早苗「墨書き山茶碗」『山城遺跡・北世古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年
 - 平川南「土器に記された文字」『月刊 文化財』(No.362) 文化庁文化財保護部 1994年
 - 『企画展 古代の硯』斎宮歴史博物館 1996年



第15図 遺物実測図 (1 : 4) SK 48(1), SK 40(2), SK 4(3~5), Pit 8(6), SK 42(7),
SE 16(8~31)



第16図 遺物実測図(1:4) SE 9(32), SE 15(33~38), SE 47(39~43), SK 1(44~50),
SK 10(51~55), SK 11(56), SK 20(57~58), SK 25(59), SK 38(60~63), SK 39(64~65),
SK 41(66~70)



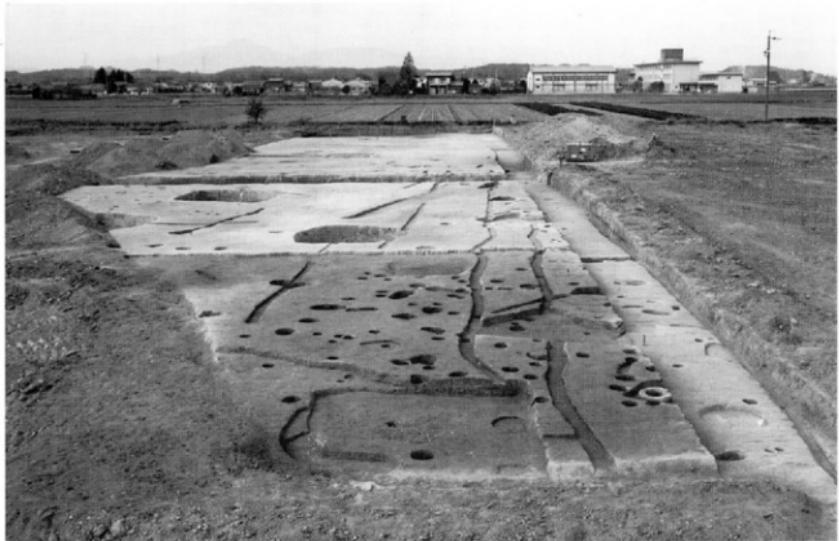
第17図 遺物実測図 (1:4, 71 = 1:5) SK 41 (71-72), SK 44 (73), SD 17 (74~77), 包含層 (78~91)

| 番号 | 登録番号 | 器種 | 遺構 | 法量(cm) | | | 調整技術の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 備考 |
|----|--------|-----------------|----------------|--------|------|-------------|---|------------------------|---------|----------|----------------|---------------------------|
| | | | | 出土位置 | 口径 | 底径 | | | | | | |
| 1 | 021-01 | 土師器S字状 口縁台付型 | G-11 SK 48 | 19.4 | 7.6 | 30.1 | 内面全体ナデ・凹凸具ナデ 口縁部ナデ 内面オサエ 底部オサエ | やや粗 (細砂粒) | 並 | 淡黄褐 | 1/2 | |
| 2 | 001-04 | 土師器 碗 | F-15 SK 40 | 12.8 | - | 4.8 | 内面ナデ・口縁部横ナデ 外面オサエ 内面底に×印 2次焼成の跡 | やや粗 (細砂粒) | 並 | にふい 裡 | ほぼ完形 | |
| 3 | 003-03 | 土師器 小皿 | B-3 SK 4 | 8.8 | - | 1.9 | 内面ナデ 外面オサエ・ナデ 粘土接合痕 | 素 ~2mmの砂粒 | 並 | 灰白 | ほぼ完形 | |
| 4 | 003-02 | クロト土師器 碗 | B-3 SK 4 | 16.3 | 7.4 | 5.6 | クロトナデ 高台付後ナデ 内面底部化 | やや粗 ~3mmの砂粒 | 不良 裡 | にふい 裡 | 口縁1/6 高台完存 | |
| 5 | 004-02 | 土師器 盤 | B-3 SK 4 | 15.0 | 7.8 | - | 内面ナデ 口縁部横ナデ 外面ナデ・捺压 痕 口縁部内面に溝が付着 | やや青 ~1.5mmの砂粒 | 並 | 灰褐 | 口縁1/5 | |
| 6 | 004-03 | 灰陶陶器 椀 | B-4 Pt18 | 14.8 | 11.6 | 4.4 | クロトナデ 外面底部クロトケズリ 高台 跡付後ナデ | 良 | 灰白 | 口縁1/6 | 高台完存 | |
| 7 | 008-04 | 土師器 皿 | C-15 SK 12 | 16.0 | 7.1 | 3.0 | 内面底部ナデ 体部横ナデ 外面底部ナデ オサエ | やや粗 (細砂粒) | 並 | 裡 | 1/2 | |
| 8 | 017-04 | 土師器 小皿 | E-9 SE 16 | 7.5 | - | 1.2 | 内面ナデ 外面オサエ | やや粗 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | ほぼ完形 | |
| 9 | 017-06 | 土師器 小皿 | E-9 SE 16 | 7.5 | - | 1.1 | 内面ナデ 外面オサエ | やや青 (細砂粒) | 並 | 淡黄 | ほぼ完形 | |
| 10 | 017-07 | 土師器 小皿 | E-10 SE 16 | 7.5 | - | 1.2 | 内面ナデ 外面オサエ | 密 | 良 | 浅黄褐 | 完形 | 外部体部に粘土接合痕 |
| 11 | 017-05 | 土陶器 皿 | E-9 SE 16 | 8.0 | - | 1.1 | 内面ナデ 外面オサエ | やや密 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | ほぼ完形 | |
| 12 | 016-06 | 土師器 皿 | E-9 SE 16 | 11.2 | - | 2.3 | 内面底部ナデ・オサエ 内面体部ナデ・凹面 体部1/2~3コロコロ凹面底部~外面上部 1/2~1/3コロコロ | やや粗 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | ほぼ完形 | 内面底部に炭化物付着 底部に穿孔1個 |
| 13 | 017-01 | 土師器 皿 | E-9 SE 16 | 11.0 | - | 2.5 | 内面底部ナデ・オサエ 内面体部~外面 1/2~1/3コロコロ 内面底部~外面下部 1/2~1/3未調整 一時板状化 | やや粗 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | 完形 | 内面底部の一部に強 い指オサエ |
| 14 | 017-03 | 土師器 皿 | E-9 SE 16 | 11.2 | - | 2.3 | 内面底部ナデ 内面体部~外面上部 1/2~3コロコロ 外面底部~外面下部 1/3~1/2未調整 一時板状化 | やや粗 (細砂粒) | 並 | 淡黄褐 | 完形 | |
| 15 | 017-02 | 土師器 皿 | E-9 SE 16 | 11.0 | - | 2.3 | 内面底部ナデ 内面体部~板状化正型 | 密 (微砂粒) | 良 | 淡黄 | 完形 | |
| 16 | 024-01 | 土師器 鉢 | E-9 SE 16 | 31.5 | - | - | 内面ナデ・凹オサエ 口縁ヨコナデ・外 面上部1/2~3ハーフ目 (5cm)・中 部1/2~1/3ハーフ目 | やや青 (微砂粒) | 並 | 淡黄 | 口縁2/5 | 外面体部全体にスス 付着 口縁部に沈継 |
| 17 | 025-01 | 土師器 鉢 | E-9 SE 16 | 32.0 | - | - | 内面ナデ 口縁ヨコナデ 内面体部上部 1/2~1/3未調整 方向にハケ目 (7cm)・中 部1/2~1/3未調整 1/2ハーフ目 | やや青 (微砂粒) | 並 | 淡黄 | 口縁1/2 | 内面体部全体にスス 付着 |
| 18 | 024-02 | 土師器 皿 | E-9 SE 16 | 19.0 | 23.0 | - | 内面ナデ 口縁ヨコナデ 内面底部上部1/2~3ナデ 1/2~1/3未調整 1/2ハーフ目 | やや粗 (微砂粒) | 並 | 淡黄 | 口縁3/5 | 外面体部にスス付着 |
| 19 | 018-01 | 陶器 皿 | D-10 SE 16 | 6.8 | 3.3 | 1.5~ 1.8 | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 | 稍良 | 良 | 灰白 | 口縁5/8 高台3/4 | 漏美6 |
| 20 | 018-03 | 陶器 山茶碗 | E-9 T SE 16 | 14.0 | 6.0 | 5.1 | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | 密 | 良 | 灰白 | 口縁1/8 高台1/2 | 尾張6 内外面に自 然転付着 |
| 21 | 018-02 | 陶器 山茶碗 | E-9 SE 16 | 15.2 | 7.0 | 5.5 | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | 密 | 良 | 灰白 | 口縁1/8 高台2/3 | 尾張6 内外面に自 然転付着 |
| 22 | 012-03 | 陶器 山茶碗 | D-9 上 SE 16 | 14.9 | 7.0 | 5.1 | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | 粗(~2.0mm) 砂粒 | 良 | 灰白 | 口縁1/6 尾張6 | 内外面に自然転 底部外側に墨書き |
| 23 | 014-01 | 陶器 山茶碗 | E-9 SE 16 | - | 6.5 | - | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | やや密 (細砂粒) 粒を少し含む | 良 | 灰白 | 高台3/8 尾張6 | 底部外側に 墨書き |
| 24 | 013-03 | 陶器 山茶碗 | E-9 SE 16 | 14.8 | 6.5 | 4.95 | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | やや密 (細砂粒) 粒を少し含む | 良 | 灰白 | 口縁1/20 尾張6 | 底部外側に 墨書き 内面側にスス 付着 |
| 25 | 013-02 | 陶器 山茶碗 | E-9 下 SE 16 | 14.7 | 6.4 | 5.15 | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | やや粗 (砂粒) 粒を含む | 良 | 灰白 | 口縁1/2 尾張7 | 内外面に自然転 底部外側に墨書き |
| 26 | 013-05 | 陶器 山茶碗 | E-6 T SE 16 | - | 6.7 | - | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | やや粗 (砂粒) 粒を含む | 良 | 灰白 | 高台2/3 尾張6 | 底部外側に 墨書き |
| 27 | 015-01 | 陶器 山茶碗 | E-9 SE 16 | - | 7.3 | - | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | やや粗 (細砂粒) 粒を含む | 良 | 灰白 | 高台1/3 尾張6 | 底部外側に 墨書き |
| 28 | 014-03 | 陶器 山茶碗 | E-9 T SE 16 | - | 5.25 | - | 内外面ロクロナデ 糸切り痕 高台貼り付 後ナデ | やや密 (細砂粒) 粒を含む | 良 | 灰白 | 高台1/3 尾張6 | 底部外側に墨書き |
| 29 | 016-02 | 磁器 青磁 | E-9 SE 16 | 17.0 | - | - | 内外面ロクロナデ・釉薬 (オリーブ黄) が かかる | 密 (細砂粒を 少し含む) | 良 | 灰白 | 口縁1/12 尾張6 | 外表面に墨書き |
| 30 | 016-04 | 磁器 青磁 | E-9 上 SE 16 | - | 2.5 | - | 内外面ロクロナデ・釉薬 (明緑灰) がかかる ケズリ出し高台 | 密 (細砂粒を 少し含む) | 良 | 灰白 | 高台1/2 尾張6 | 外表面に墨書き |
| 31 | 019-01 | 木製品 曲げ物 | E-9 下 SE 16 | - | - | - | | | | | | 樹脂じ部分 |

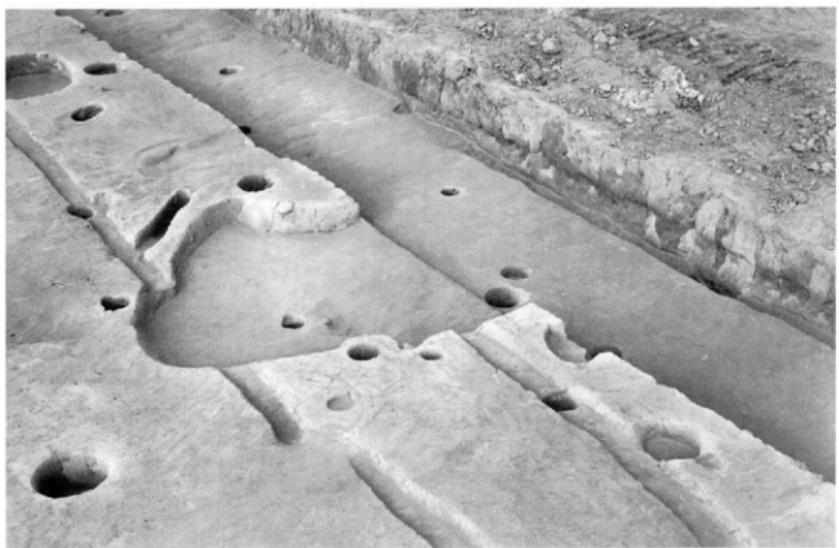
| 番号 | 登録番号 | 器種 | 遺構 | | | 法量 (cm) | 調査技法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 残存 | 備考 | |
|----|--------|-------------------|---------------|------|------------|---------|--|----------------------------|----|-----|----------------|---------------------------|
| | | | 出土位置 | 口径 | 底径 | | | | | | | |
| 32 | 008-05 | 陶器 山茶碗 | C-6 SE 9 | 15.4 | 6.2 | 4.5 | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ 高台底部に底疣 | やや密 (微砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/10 高台完存 | 尾張6 |
| 33 | 010-05 | 土師器 小瓶 | E-9 SE 15 | 8.4 | - | 1.1 | 内面底部ナダ 内面体部・口縁部横ナダ 外面オサエ | やや粗 (細砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/3 | |
| 34 | 010-03 | 陶器 山瓶 | E-10 SE 15 | 9.0 | - | 1.8 | 内外面クロナダ 底部糸切痕 | やや密 (細砂粒) | 良 | 灰白 | 1/2 | 尾張5 |
| 35 | 014-02 | 陶器 山本碗 | F-7 SE 15 | - | 6.2 | - | 内外面クロナダ 露部糸切り痕 高台貼 り付け後ナダ | やや密 (細砂粒) | 良 | 灰白 | 底部1/5 | 尾張6 蓋部外面に 墨書き 高台に粗砂痕 |
| 36 | 010-01 | 土師器 羽釜 | E-9 SE 15 | 23.8 | 羽径 29.3 | - | 内面ヘラケズリ 口縁部横ナダ 細砂粒貼 り分け後ナダ・外側体部 ヘラケズリ | やや粗 (砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/12 | |
| 37 | 009-02 | 陶器 甕 | E-7 SE 15 | 49.4 | - | - | 内外面クロナダ | やや密 (細砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/20 | N字状口縁 |
| 38 | 016-05 | 青磁 椀 | E-10 SE 15 | - | 5.5 | - | 内外面クロナダ・施釉 ケズリ出し高台 底部底面に蓮弁文 | 密 (微砂粒) | 良 | 灰白 | 底部1/4 | |
| 39 | 020-01 | 土師器 鍋 | - SE 47 | 21.6 | - | - | 内面新上3ヶ所ナダ・下部1/3ヶ所リ 口縁部横 リ・6.0cmオサエ横ナダ・上部1/2ヶ所メタリ 下部1/2ヶ所ヘラケズリ・外側1/3ヶ所メタリ (8本/cm)・下部1/2ヶ所ヘラケズリ | やや粗 (細砂粒 を含む) | 並 | 淡黄 | 口縁3/8 | 外面部にスス付着 |
| 40 | 023-01 | 土師器 鍋 | - SE 47 | 27.1 | - | - | 内面体部ナダ 口縁部横ナダ・外面上部 1/6オサエ横ナダ・上部1/2ヶ所メタリ (8本/cm)・下部1/2ヶ所ヘラケズリ | やや密 (微砂粒 を含む) | 並 | 黄橙 | 口縁2/5 | 外面部にスス付着 |
| 41 | 013-01 | 陶器 山茶碗 | D-23 SE 47 | 15.1 | 6.9 | 5.25 | 内外面クロナダ 糸切痕 高台貼り付け 後ナダ高台に板殻痕 | やや粗(~3mm 砂粒少し含む) | 良 | 灰黄 | 口縁1/2 高台完形 | 尾張6 蓋部外面に 墨書き |
| 42 | 010-02 | 陶器 山茶碗 | D-23 SE 47 | 17.2 | 4.1 | 5.1 | 内外面クロナダ 糸切痕 高台貼り付け 後ナダ | やや粗 (砂粒 を含む) | 良 | 灰白 | 口縁1/4 | 尾張6 内面に自然 施釉付着 |
| 43 | 009-03 | 陶器 甕 | E-23 SE 47 | 49.5 | - | - | 内外面クロナダ 外面体部一部にオサエ | やや密 (砂粒 を含む) | 良 | 赤褐 | 口縁1/12 | 常滑窯 N字状口縫 |
| 44 | 003-04 | 土師器 里 | C-3 SK 1 | 16.2 | 7.1 | 5.8 | 内面・口縁部ナダ 外面オサエ | やや密 (~1.5mm の砂粒) | 並 | 浅黄椎 | 完形 | 内面に工具痕 外面部に粘土接合痕 |
| 45 | 004-01 | 土師器 鍋 | B-2 SE 1 | 30.2 | - | - | 内面ナダ 口縁部横ナダ・オサエ | やや粗 (~ 2.0mm の砂粒) | 並 | 灰白 | 口縁1/6 | 磨擦のため調整不明 理 |
| 46 | 003-06 | 陶器 小舟 | B-3 SE 1 | 10.5 | 4.9 | 3.0 | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ 糸切痕内面・外側1/3自然縮 | やや密 (~ 2.0mm の砂粒) | 良 | 灰 | 口縁1/5 底部2/5 | 尾張4 |
| 47 | 003-05 | 陶器 山茶碗 | B-2 SK 1 | 16.2 | 7.1 | 5.8 | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ・ 板殻痕 | 密 (砂質微砂 粒) | 良 | 灰 | 口縁小基 底部1/2 | 美濃5 |
| 48 | 003-01 | 陶器 山茶碗 | C-2 SK 1 | 16.5 | 7.7 | 4.8 | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ 糸切痕内面体部へ外面上部1/3自然縮 | 密(~1.5mm の砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/6 底部完形 | 美濃6 |
| 49 | 014-04 | 陶器 山茶碗 | C-2 SK 1 | - | 8.0 | - | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ | やや密 (砂粒) | 良 | 灰白 | 底部1/4 | 美濃6 外側底部に 墨書き |
| 50 | 016-03 | 青磁 椀 | C-2 前後 | 16.0 | - | - | 内外面クロナダ 離葉を施す | 密 (砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/10 小片 | 内面にヘラガキ紋 |
| 51 | 014-05 | 陶器 山茶碗 | B-7 SK 10 | - | 6.5 | - | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ | やや密 (砂粒) | 良 | 灰白 | 底部ほぼ全 形 | 外側底部に墨書き |
| 52 | 005-04 | 陶器 山茶碗 | B-7 SK 10 | 15.3 | 6.5 | 5.1 | 内外面クロナダ 高台貼り付け後ナダ 底面高台粘着部分切痕 内面体部・外側口縁 砂質附着物 | やや密(~1.0mm の砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/8 高台完形 | 尾張6 高台都般痕 重ね焼き痕 自然縮 |
| 53 | 005-01 | 陶器 山茶碗 | A-7 SK 10 | 15.0 | 5.7 | 5.7 | 内外面クロナダ 高台貼り付けのちナダ 底部凹版切痕 | やや密(~1.0mm の砂粒) | 良 | 灰白 | ほぼ完形 | 尾張6 高台に一部 都般痕 |
| 54 | 015-03 | 綠釉陶器 皿? | B-7 SK 10 | - | - | - | 内面クロナダ 外延クロケズリ 高台 貼り付けナダ 全体に施釉 | やや密 (微砂粒) | 良 | 灰白 | 小片 | 謹投窯 |
| 55 | 015-05 | 土瓶 | A-7 SK 10② | 0.35 | 1.5 | 4.9 | 穴径 長さ | やや密 (微砂粒) | 良 | 灰白 | 完形 | |
| 56 | 005-06 | 土師器 ミニチュア 瓶 | A-4 SK 11 | 9.0 | - | 4.2 | 内面ナダ 口縁部横ナダ 外面オサエ後ナ ダ | やや密 (~1.0mm の砂粒) | 良 | 淡黄椎 | 口縁1/4 | 外側体部に粘土接合 痕 |
| 57 | 016-01 | 綠釉陶器 皿? | B-10 SK 20 | - | 6.5 | - | クロナダ 底部糸切り痕 | やや密 (微砂粒) | 良 | 灰 | 底部1/4 | |
| 58 | 009-01 | 陶器 甕 | B-10 SK 20 | 49.0 | - | - | 内外面クロナダ | やや粗 (砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/24 | N字状口縫 |
| 59 | 010-04 | 土師器 小皿 | A-15 SK 25 | 8.3 | - | 1.3 | 内面ナダ 外面オサエ | やや粗 (細砂粒) | 良 | 浅黄椎 | 口縁3/4 | |
| 60 | 006-05 | 土師器 小皿 | D-16 SK 38 | 8.1 | - | 0.95 | 内面ナダ 外面オサエ | やや粗 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | 完形 | |
| 61 | 006-03 | 土師器 皿 | D-16 SK 38 | 12.8 | - | 2.8 | 内面ナダ 口縁部横ナダ 外面オサエ後ナ ダ | やや密 (細砂粒) | 良 | 浅黄椎 | ほぼ完形 | 磨擦のため調整不明 理 |
| 62 | 012-01 | 陶器 山茶碗 | D-16 SK 38 | 15.5 | 6.1 | 5.4 | 内外面クロナダ 内面底部ナダ 底部糸 切痕 | 密(~3.0mm の砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1/3 底部完存 | 尾張7 外側体部及 び底部に墨書き |

| 番号 | 登録番号 | 器種 | 遺構 出土位置 | 口径 底径 高さ | 法量(cm) | 調査技術の特徴 | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存 | 備考 |
|-------------|--------------------|-------------------|------------|----------------|--------|---|--|---------------------|----|--------------|-----------------|-----------------------|
| | | | | | | 口径 | 底径 | | | | | |
| 63 012 - 02 | 陶器 山茶椀 | D-16 SK 38 | 15.2 | 6.5 | 5.1 | 内外面クロナダ 内面底部横ナダ 底部系切痕 高台貼り付け後ナダ | | 粗(～3.0mm) (砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1／4 底部完全 | 尾張6 外面底部に墨書 |
| 64 006 - 04 | 土師器 小皿 | C-17 SK 39 | 8.9 | — | 1.55 | 内面ナダ 口縁部横ナダ 底部オサエ後ナダ | | やや粗 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | 完形 | |
| 65 006 - 02 | 土師器 皿 | C-17 SK 39 | 15.2 | — | 3.25 | 内面ナダ 口縁部横ナダ 底部オサエ | | やや粗 (細砂粒) | 良 | 淡黄橙 | 完形 | |
| 66 008 - 01 | 土師器 小皿 | E-17 SK 41 | 7.8 | — | 1.3 | 内面～外面上部1／2ナダ 外面オサエ | | やや密 (微砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁3／8 | |
| 67 008 - 03 | 土師器 皿 | E-17 SK 41 | 12.6 | — | 2.5 | 内面～外面上部1／2ナダ 外面オサエ | | やや密 (微砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁3／4 | 内面底部に黒斑 |
| 68 006 - 01 | 陶器 山茶椀 | E-17 SK 41 | 15.1 | 6.9 | 4.6 | 内外面クロナダ 内面底部横ナダ 底部系切痕 高台貼り付け後ナダ | 内面体部 | 粗(～3.0mm) (砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁1／2 | 尾張6 高台に粗砂質 |
| 69 008 - 06 | 陶器 山茶椀 | E-17 SK 41 | 14.6 | 7.2 | 5.3 | 内外面クロナダ 底部系切痕 高台貼り付け後ナダ | 内面体部 | 粗(～3.0mm) (砂粒) | 良 | 灰白 | 口縁3／4 底部完全 | 源美6 高台に粗砂質 内面が黒く変色 |
| 70 013 - 04 | 陶器 山茶椀 | E-17 SK 41 | — | — | 6.8 | 内外面クロナダ 内面底部ナダ 底部系切痕高台貼り付け後ナダ | | やや粗 (細砂粒) | 良 | 灰白 | 底部完全 | 尾張6 外面底部及び体内に墨書 |
| 71 007 - 01 | 丸瓦 | E-17 SK 41 | — | — | — | | | | | 淡黄 | | 内面部に布目痕 |
| 72 007 - 02 | 石硯 | E-17 SK 41 | 確 10.1 | 高さ 2.3 | — | | | | | 白 | | 方形石硯 |
| 73 008 - 02 | 土師器 皿 | E-10 SK 44 | 11.8 | 8.4 | 2.5 | 内面ナダ 外面ナダ 底部オサエ | | やや粗(小石 少し含む) | 不良 | 淡黄 | 口縁3／4 | |
| 74 005 - 05 | 土師器 皿 | D-8 SD 17 | 11.7 | — | 2.4 | 内面ナダ 外面オサエ | | やや粗(1mmの 微砂粒含む) | 良 | 淡黄橙 | 完形 | 内外面磨減のため、 調整不明瞭 |
| 75 005 - 03 | 土師器 皿 | D-8 SD 17 | 12.7 | — | 2.4 | 内面ナダ 外面オサエ | | やや粗(1mmの 微砂粒含む) | 良 | 淡黄橙 | ほぼ完形 | 76の鍋の下から出土 |
| 76 022 - 02 | 土師器 鍋 | D-8 SD 17 | 18.8 | — | — | 内外面クロナダ 口縫部横ナダ 体部上部2／3ナダ(～3ケタ)、口縫部横ナダ(～3ケタ)、外縫部横ナダ(～3ケタ)、下部(～3ケタ) | 口縫部横ナダ(～1mmの 砂粒) | やや粗(～1mm の小石、砂粒) | 並 | 淡黄 | 口縫部横ナダ 体部2／3 | 外面部に僅付着 |
| 77 005 - 02 | 陶器 山茶椀 | D-8 SD 17 | 15.0 | 6.5 | 5.1 | 内外面クロナダ 底部回転系切り痕後ナダ 高台貼り付け後ナダ | | やや密(～1mm の砂粒) | 良 | 灰白 | ほぼ完形 | 尾張6 高台全体に 粗砂質が多く残る |
| 78 002 - 02 | 土師器 小型丸皿 包含層 | C-11 包含層 | 8.6 | — | 9.9 | 口縫部横ナダ 体部上面1／2オサエ、1／2ケタ | | やや粗 (細砂粒) | 並 | 淡黄橙 | 口縁1／2 | |
| 79 002 - 01 | 土師器 杯 | D-11 包含層 | 19.3 | 12.9 | — | 杯内部内側ハケメ(9本／cm)後ナダ、脚部内側ハケメ(9本／cm)、脚部外側ハケメ(3本／cm) | 脚部内側ハケメ(細砂粒) | やや粗 (細砂粒) | 並 | 橙 | ほぼ完形 | |
| 80 026 - 01 | 土師器 字状 口縫台付甕 | E-21 22 | 15.7 | — | — | 内面底部ナダ～工具ナダ 口縫部横ナダ(3本／cm)、外縫部ハケメ(3本／cm) | 内面底部ナダ～工具ナダ(細砂粒) | やや密 (細砂粒) | 良 | 淡黄橙 | 台部分を欠く | D2類 |
| 81 001 - 01 | 蒸器 杯蓋 | A-13 包含層 | 12.8 | — | 3.6 | 内面上部ナダ 内面下部～外縫部下部ロクロ | 内面上部ナダ(細砂粒) | やや粗(～1mm の砂粒) | 並 | 灰白 | 1／2 | 6世紀末 |
| 82 001 - 02 | 蒸器 杯身 | A-13 包含層 | 11.4 | — | — | 内面底面1／2ナダ 内面1／2～外縫部クロナダ | 内面底面1／2ナダ(細砂粒) | やや粗 (細砂粒) | 並 | 灰白 | 1／2 | 6世紀末 |
| 83 011 - 02 | 土師器 鉢 | E-7・8 土師器 鉢 | 10.8 | — | 3.6 | 内面ナダ 口縫部横ナダ 外面オサエナダ | 内面ナダ(細砂粒) | やや密 (細砂粒) | 並 | 淡黄 | 体部定形 口縁5／6 | |
| 84 001 - 03 | 土師器 鉢 | E-6 包含層 | 12.0 | 5.6 | 5.0 | 内面ナダ 口縫部横ナダ 外面オサエ 外縫部粘土接合部 | 内面ナダ(細砂粒) | やや粗 (細砂粒) | 並 | 橙 | 完形 | 5個重なって出土 |
| 85 027 - 01 | 土師器 長板巻 | E-7・8 包含層 | 22.8 | — | — | 内面ナダ 上部1／3ハケメ(6～7本／cm) 只縫部横ナダ 外部 ハケメ(6～7本／cm) | 内面ナダ(細砂粒) | 粗 にぶい | 良 | 灰橙 | 底部欠く | |
| 86 022 - 01 | 土師器 盤 | E-5 包含層 | 25.5 | — | 14.0 | 内面側面ハケメ(6本／cm) 口縫部横ナダ(6本／cm)、外縫部(6本／cm)、外縫部に黒斑 | 内面側面ハケメ(6本／cm) 口縫部横ナダ(6本／cm)、外縫部(6本／cm) | やや粗(～1mm の砂粒) | 並 | 淡黄 | 体側ほぼ完形 口縁1／2 | |
| 87 020 - 02 | 土師器 把手付甕 | E-7・8 土器群No.1 | 28.8 | — | — | 内面ハケメ(6本／cm) 口縫部内面横ナダ ナダ後ハケメ(6本／cm) 口縫部外面横ナダ(6本／cm) | 内面ハケメ(6本／cm) 口縫部内面横ナダ ナダ後ハケメ(6本／cm) 口縫部外面横ナダ(6本／cm) | やや粗 (細砂粒) | 並 | 橙 | 口縁1／2 | |
| 88 015 - 04 | 土瓶 | C-11 包含層 | 穴径 9.0 | 3.95 | 7.9 | — | | やや密 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | 完形 | |
| 89 011 - 01 | 土師器 壺 | E-7・8 土器群No.8 | 14.6 | 15.2 | 13.0 | 内面ナダ 口縫部横ナダ 外面下部ハケメ(6本／cm)、外縫部(6本／cm)、外縫部に黒斑 | 内面ナダ(細砂粒) | やや密(～1.5mm の砂粒) | 並 | にぶい 體小量欠く | 体部小量欠く 口縁5／6 | 内面に工具痕 |
| 90 011 - 03 | 黑色土器 鉢 | E-11 包含層 | — | 高台 6.9 | — | 内外面ミガキ 高台貼り付け後ナダ | 内外面ミガキ(6本／cm) | やや密(～1.5mm の砂粒) | 良 | 黑 | 体部1／4 高台小量 | |
| 91 015 - 02 | 縦輪陶器 皿? | D-6 包含層 | — | — | — | 内面クロナダ 外面クロケズリ 高台 貼り付けナダ 全体に施釉 | 内面クロナダ(細砂粒) | やや密 (細砂粒) | 良 | 淡黄 | 底部1／3 | |

図版 1



調査区全景（東から）

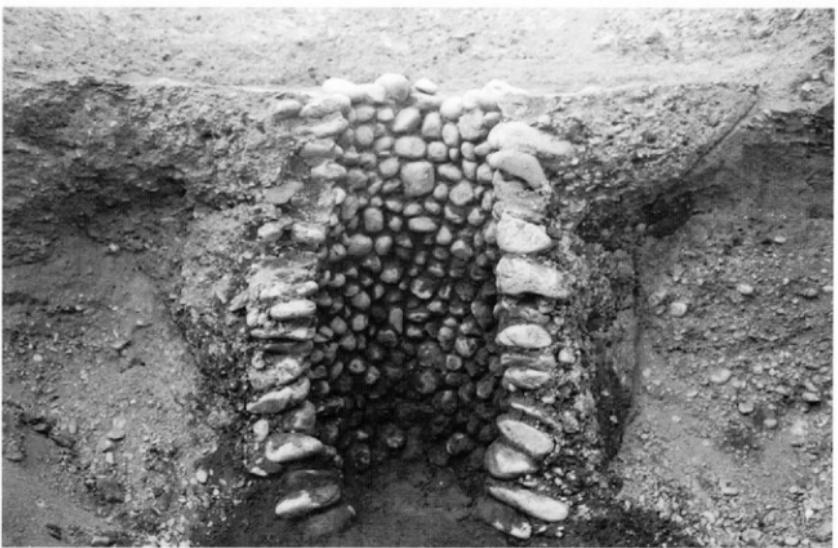


SB 1 (南東から)

図版2



S E 9 (北から)



S E 9 (南から)

図版 3

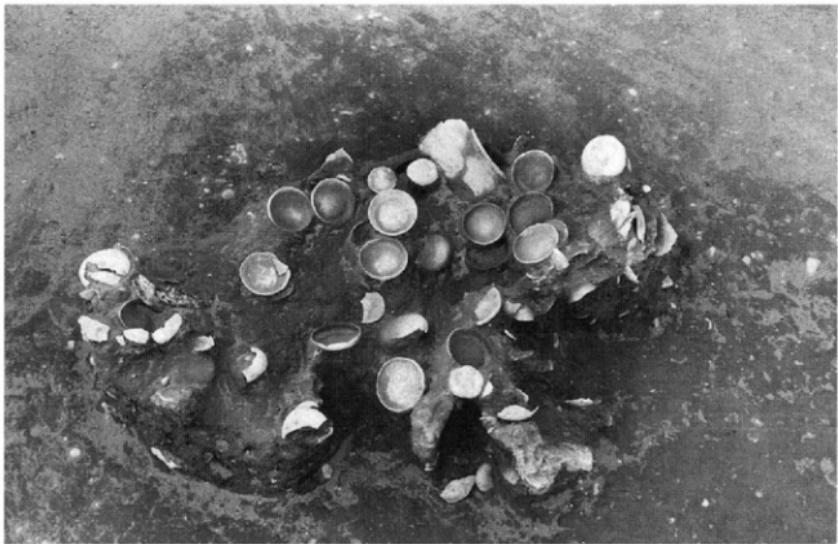


SE 16 底部（東から）

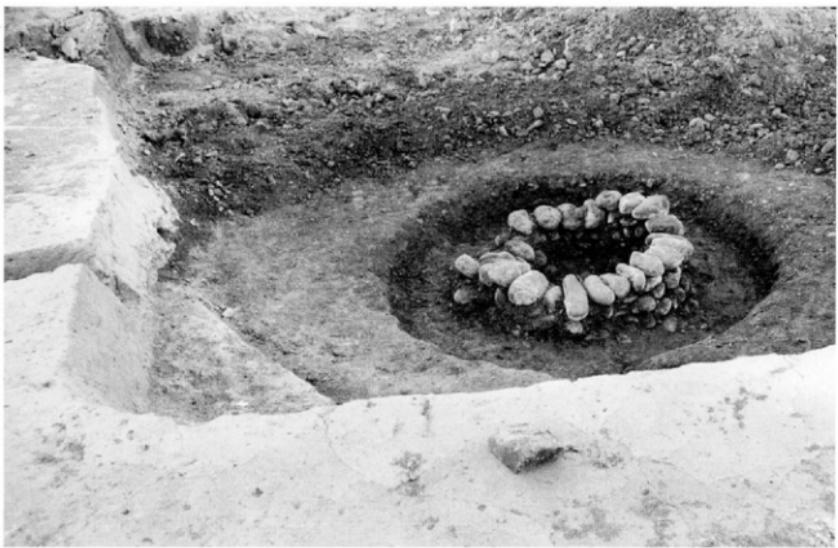


SE 16 断面（西から）

図版4



SE 16 遺物出土状況（上層土師器皿群）



SE 15（西から）

図版5



S E 47 (西から)



S E 47 断面 (西から)

図版 6

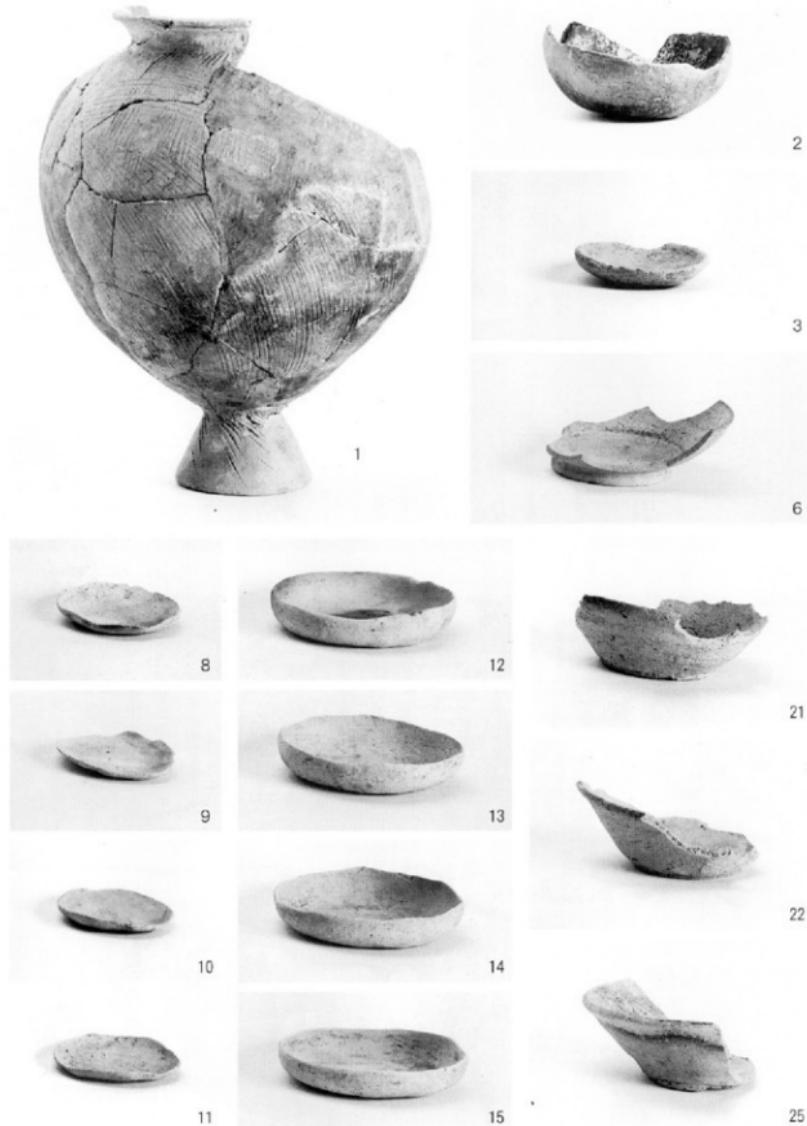


SK 38 (東から)



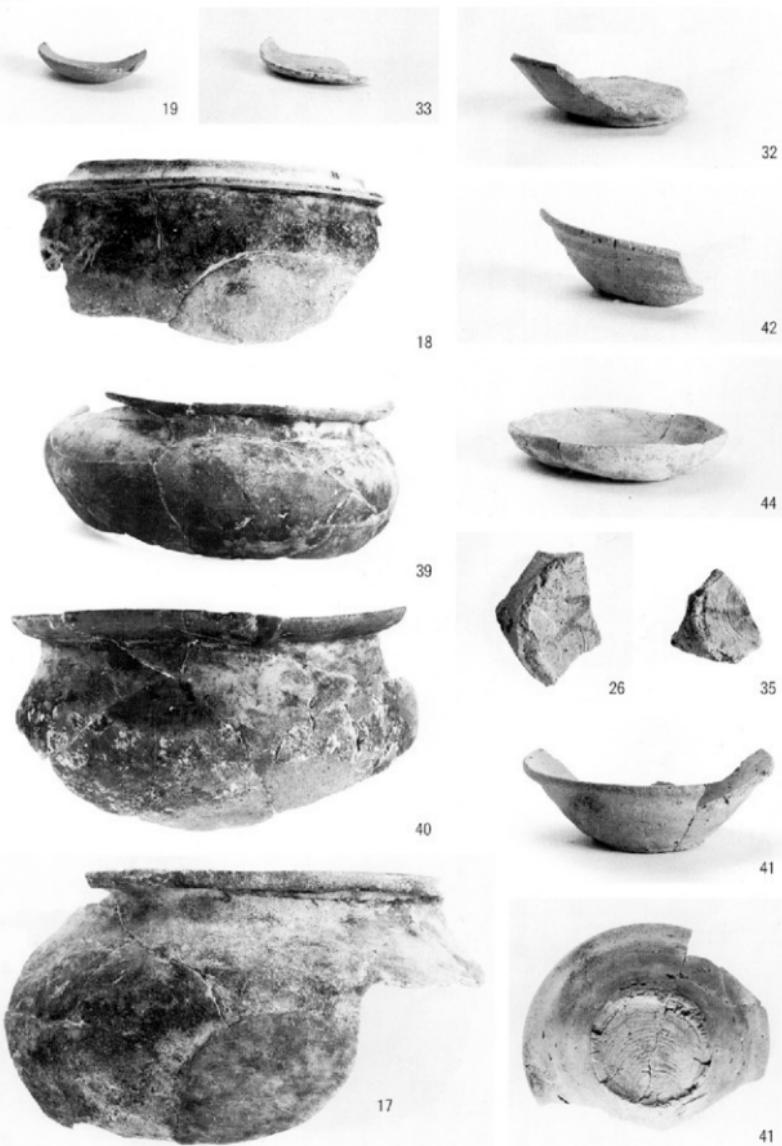
調査区東部分作業風景（西から）

図版 7



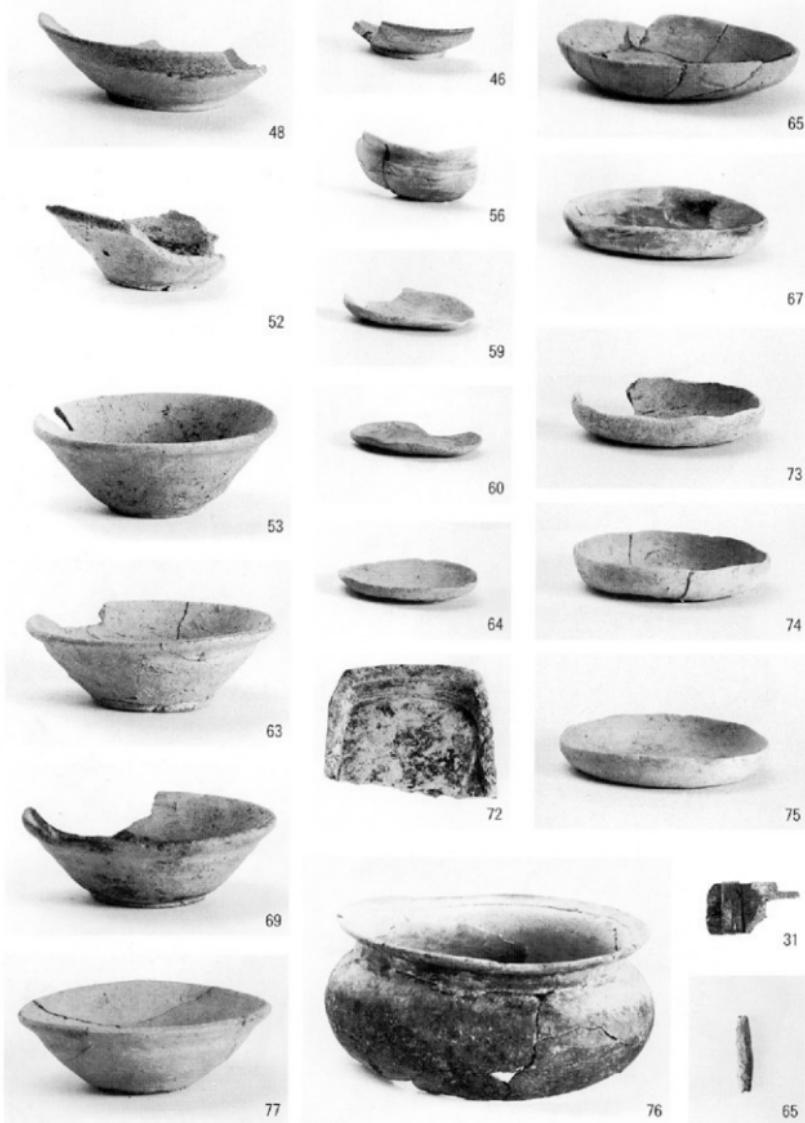
出土遺物 (1 : 3)

図版 8



出土遺物 (1 : 3)

圖版9



出土遺物（1：3）

II 松阪市井口中町 山口遺跡

1 位置と環境

山口遺跡(1)は行政上、松阪市井口中町字山口に所在する。位置は近鉄山田線瀬代駅北方約2kmにあり、東は多気郡明和町との境となっている。

本遺跡は自然堤防上に立地し、西に櫛田川、東に蔵川が北に向いて流れている。

地理的環境及び歴史的環境の詳細については本書所収の「古川遺跡」の報告で述べているのでここで

は省略する。

本遺跡の北方には神麻績機殿神社が所在する。これが「延喜神名式」に見受けられる「麻績神社」と考えられている。しかし、「麻績神社」の比定は古来より問題があり、祭神などを含めて今日まで解決に至っていない。³⁾

2 遺構と遺物

主な遺構は溝3条のみである。なお、調査区中央部にピット群が見られる。これらの柱穴の深さや幅は一定していない。このことから建物跡とは認めなかった。遺物はコンテナバットで9箱分出土した。
SD 1 調査区の西より、東に向いて蛇行して流れていた溝である。幅約0.6m、深さ約0.2mである。

時期については土師器の小片が出土しただけで時期は不明である。

SD 2 調査区の東側を南に向いて流れている溝である。幅は南へ行くほど広がりを見せている。溝の深さは中央部で1.2mである。

遺物は江戸時代の土師器・陶器の小片が少量出土



第18図 遺跡位置図 (1:50,000)

した。受付灯明皿（6）は、江戸時代後葉のものと思われる。

S D 3 調査区の東側を南に向いて流れている溝で

ある。幅は約0.8m、深さは約0.4mである。遺物は土師器壺（1～3）・須恵器壺（4・5）が出土した。時期は奈良時代前半である。

3 結 語

今回の調査区は山口遺跡の東端部分である。検出された主な遺構は溝3条のみであることから遺跡の

縁辺部にあたると思われる。（山田康博）

註

- ① 岡田登「麻績神社」（式内社調査報告書編『式内社調査報告』第6巻 東海道1 1992年）。
- ② 羽生淳子「かわらけ・灯明具類」（『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1』東京大学本郷構内の遺跡理学

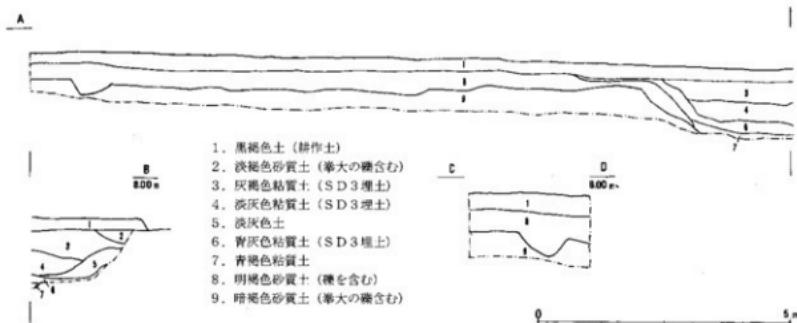
部7号館地点、東京大学理学部遺跡調査室 1989年）。
③ 三重県教員委員会「奈宮跡の土師器」（『奈宮跡調査事務所年報1984』1985年）。



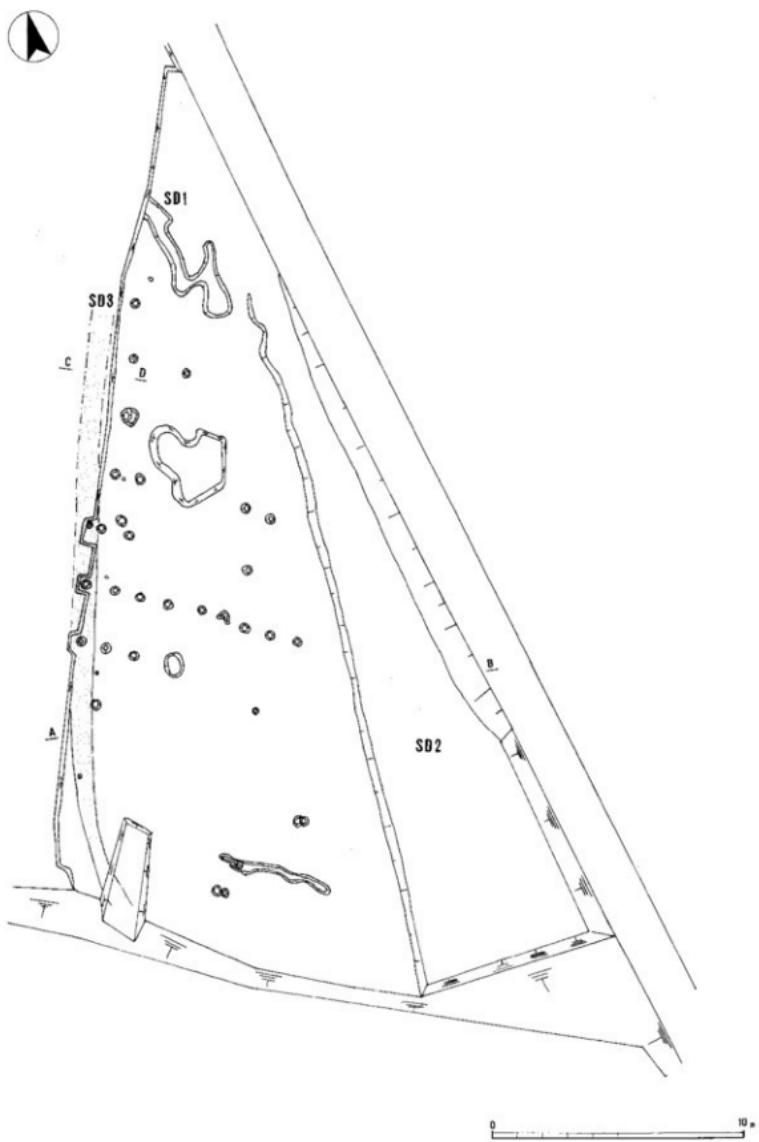
第19図 遺跡地形図 (1:5,000)



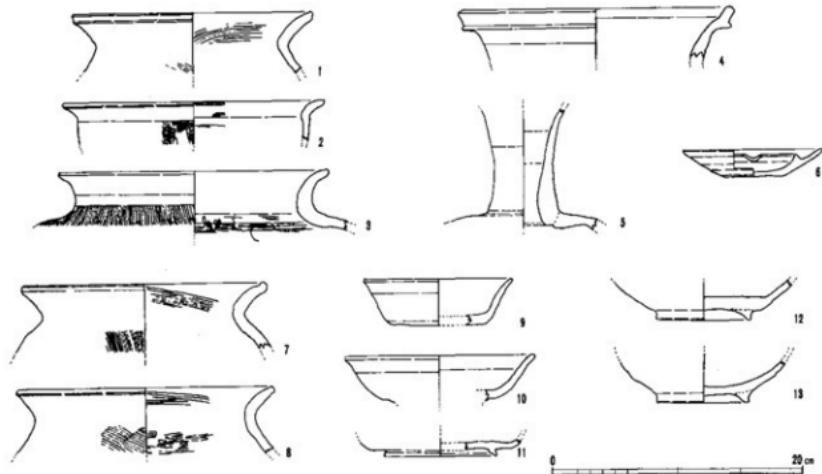
第20図 調査区位置図 (1:2,000)



第21図 S D 2 及び S D 3 土層断面図 (1:100)



第22図 遺構平面図 (1:200)



第23図 遺物実測図(1:4)

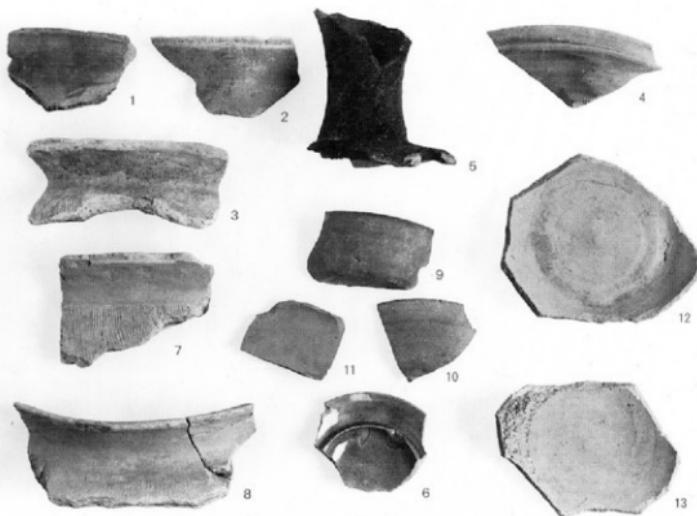
| No. | 登録No. | 器種 | 出土位置 遺構 | 法量(cm) | | | 調整技法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存度 | 備考 |
|-----|--------|-------------|-------------|--------|-----|-----------|---------------------------------------|-----------|----|------|----------|----|
| | | | | 口径 | 器高 | その他 | | | | | | |
| 1 | 001-03 | 土師器 甕 | B 4 SD 3 | 18.8 | | | 口縁部：ヨコナデ 体部内・外面：ハケ目 | 微砂粒 含む | 良 | 淡黄色 | 1/6 | |
| 2 | 002-01 | 土師器 甕 | B 4 SD 3 | 20.5 | | | 口縁部：ヨコナデ、ハケ目が残る 体部内・外面：ハケ目 | 微砂粒 含む | 良 | 浅黄橙色 | 1/8 | |
| 3 | 003-01 | 土師器 甕 | B 4 SD 3 | 21.2 | | | 口縁部：ヨコナデ 体部内・外面：ハケ目 | 微砂粒 含む | 良 | 浅黄橙色 | 1/4 | |
| 4 | 002-02 | 須恵器 広口盃 | B 4 SD 3 | 21.0 | | | 口縁部：ロクロナデ | 微砂粒 含む | 良 | 灰色 | 1/6 | |
| 5 | 003-03 | 須恵器 長颈瓶 | B 4 SD 3 | | | | 体部内・外面：ロクロナデ | 微砂粒 含む | 良 | 灰色 | | |
| 6 | 002-06 | 陶器 受付灯明皿 | C 3 SD 2 | 11.0 | 2.0 | | 体部内・口縁部：ロクロナデ 体部外縁：ハラケズリ | 微砂粒 含む | 良 | 灰白色 | 1/5 | |
| 7 | 001-01 | 土師器 甕 | B 8 包含層 | 19.2 | | | 口縁部：ヨコナデ、ハケ目が残る 体部内・外面：ナデ | 微砂粒 含む | 良 | 淡黄色 | 1/4 | |
| 8 | 001-02 | 土師器 甕 | C 8 包含層 | 20.4 | | | 口縁部：ヨコナデ 体部内・外面：ハケ目 | 微砂粒 含む | 良 | 黄橙色 | 1/9 | |
| 9 | 001-04 | 須恵器 杯 | B 8 包含層 | 11.8 | 3.8 | | 体部内・外面：ロクロナデ 底部外縁：未調査 | 微砂粒 含む | 良 | 灰色 | 1/5 | |
| 10 | 002-03 | 須恵器 高杯 | C 9 包含層 | 15.2 | | | 体部内・外面：ロクロナデ | 微砂粒 含む | 良 | 灰白色 | 1/8 | |
| 11 | 002-04 | 須恵器 杯 | B 8 包含層 | | | 底径 9.0 | 体部内・外面：ロクロナデ 貼り付高台：ナデ 底部外縁：ハラ切り | 微砂粒 含む | 良 | 灰白色 | 1/5 | |
| 12 | 001-04 | 山茶碗 | B 8 包含層 | | | 底径 7.4 | 体部内・外面：ロクロナデ 貼り付高台：ナデ 底部外縁：糸切り痕 | 微砂粒 含む | 良 | 灰白色 | 底部 完形 | |
| 13 | 001-05 | 山茶碗 | B 8 包含層 | | | 底径 7.3 | 体部内・外面：ロクロナデ 貼り付高台：ナデ 底部外縁：ナデ | 微砂粒 含む | 良 | 灰白色 | 底部 完形 | |

第4表 遺物観察表

図版 10



調査区全景（南から）



出土遺物

報告書抄録

| ふりかな | ふるかわいせき やまぐちんせき はつくつちょうさほうこく | | | | | | |
|------------------|-------------------------------------|------------------------|--|--|---|------------------------|-------------------------|
| 書名 | 古川遺跡・山口遺跡 発掘調査報告 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 133-3 | | | | | | |
| 編著者名 | 伊藤裕之 山田康博 | | | | | | |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 | | | | Tel 05965(2)1732 | | |
| 発行年月日 | 西暦1996年3月29日 | | | | | | |
| ふりかな 所収遺跡名 | ふりかな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 度 分 秒 | 東經 度 分 秒 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| ふるかわいせき 古川遺跡 | みえけんまつやまかし いながま 三重県松阪市稻木 町字古川 | 24205 | 34° 32' 07" | 136° 35' 36" | 19951101 19951222 | 1,700 | 平成7年度 県営ほ揚整備事業（滑代地区） |
| やまとぐちいせき 山口遺跡 | みえけんまつやまかし いだく 三重県松阪市井口 中町字山口 | 24205 | 34° 33' 09" | 136° 68' 64" | 19950710 19950724 | 340 | 平成7年度 県営ほ揚整備事業（機殿地区） |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 古川遺跡 | 集落跡 | 古墳時代～ 鎌倉時代 | 鎌倉時代 掘立柱建物1棟、 石組井戸4基、 溝3条、土坑13基 | S字状口縁台付壺、 土師器皿、瓶、鍋、 羽釜、綠釉陶器、灰 釉陶器、山茶碗、陶 器壺、青磁碗、土鍵、 瓦、方形石硯 | 鎌倉時代を中心とする 集落跡。鎌倉時代 前期の石組井戸4基 検出。墨書き茶碗16 個出土。 | | |
| 山口遺跡 | 集落跡 | 奈良時代、 鎌倉時代、 江戸時代 | 奈良時代 溝1条 江戸時代 溝1条 | 土師器壺、須恵器長 頸壺、広口壺、杯、 高杯、受付灯明皿 | | | |

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 133-3

古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告

1996(平成 8 年)年 3 月

編 集 行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社
